

庄内農村研究の「方法」と実際（上）

—細谷昂・菅野正両氏に聞く—

伊 藤 勇^(*)

（2012年 9 月28日 受付）

キーワード：地域科学，村落社会研究，事例研究法，モノグラフ，庄内農村

目 次

- 1 はじめに
- 2 細谷昂氏とのインタビューと議論
 - （1）共同研究前史——農民意識調査から水稻集団栽培調査まで
 - （2）共同研究のスタート——林崎調査
 - （3）『東北農民の思想と行動』へ——北平田調査
 - （4）モノグラフ的手法と一般化の問題をめぐって（以上本号）
- 3 菅野正氏とのインタビューと議論
- 4 小括
謝辞

1 はじめに

村落社会研究におけるモノグラフの方法的意義をめぐって

先に筆者は、『村落社会研究ジャーナル』に小論¹を寄稿し，村落社会研究におけるモノグラフ的手法（特定村落に焦点を合わせた徹底的な事例研究法）の特長や方法的意義について，菅野^{かんの}

¹伊藤勇，2012，「村落社会研究における事例研究の方法的意義—菅野正・田原音和・細谷昂3氏の庄内農村研究に学ぶ—」，『村落社会研究ジャーナル』（日本村落研究学会），36号，44-55頁。

*福井大学教育地域科学部地域政策講座

まさし たはらおとより ほそやたかし
正・田原音和・細谷 昂 3 氏による山形県庄内地方の農村研究の成果と実際に即して、筆者なりの検討と評価を試みた。その暫定的結論を手短に述べると、次の通りである。第 1 に、3 氏の庄内農村研究は、事例研究としてみた場合、歴史的な変化と重層において村落や農民生活の現在を捉える視点が特長的であり、研究のねらいにおいて、事例の分厚い個性記述を重視するのはもちろんのこと、その上で、特定事例に立脚しつつ一定の理論的な命題ないし説明モデルを提起しようとしている点が注目される。第 2 に、3 氏の提出する知見は、庄内農村の事例に即した具体的知見と、事例を念頭に置きつつもより一般的な形で述べられる知見とから成るが、これらを総合するところに、近現代の東北地方をはじめとする水稲単作地帯において、「家」を単位として営まれ「村」に結節して展開する農民生活の存立と変動に関する実質的理論を見いだすことができるように思われる。第 3 に、3 氏の調査研究の方法態度として顕著な点は、調査研究は一定の視角や概念に導かれつつも、事例とその世界への密着・沈潜・精通から得られた観察事実と情報に即して、視角や概念それ自体を練り上げ、知見をまとめていくべきとする、対象との柔軟かつ強靱な向き合い方である。これらの特長をもち、様々な人びととの出会いにも助けられて、3 氏の共同研究は遂行され、現代日本の村落研究においてモノグラフ的手法の意義と有用性を実証する 1 つの範例ともいえるべき成果を生み出すことになった。

インタビューについて

以上のような小論の執筆に当たり、細谷昂氏と菅野正氏には、小論で取り上げた 2 著を中心に、調査研究の視角や方法そして実際について、是非とも直接にお話しをうかがいたく、個別にインタビューをお願いした。幸いにも機会を設けていただくことができ、そのお話は筆者の理解の大きな助けとなった。ここに公開するのは、そのインタビューの記録である。なお、記録には同席の方々を交えた議論が含まれている。2 や 3 の標題を「インタビューと議論」としたのはそのためである。

これらのインタビューは、当初から公開を予定して行ったものではない。しかし、うかがった話の貴重さや興味深さ、現代日本の社会調査史における資料としての価値に鑑み、是非とも公開したいと思うに至り、記録公刊の了解を両氏にお願いした。以下にご覧の通り、両氏は、共同研究以前の問題関心や調査経験、時代と研究との関わり、対象地選択のいきさつ、様々な人びとのエピソード、実地調査や執筆の実際など、通常公表されることの少ない調査研究の舞台裏を縦横に語られ、聞き手のわれわれの興味は尽きることがなかった。それらは、方法論や技法のような形で物化される以前の、対象や現実への向き合い方・探り方といった意味での調査研究の「方法」²に関わる示唆にも富み、事例研究による認識の特質や深め方に関わる重要な発言も含まれる。

記録は、筆者の評価や解釈とは独立に、読まれるべき豊富な内容を有しており、3 氏の研究に関心を寄せる方々、村落社会研究の方法と実際に関心を寄せる方々、さらに、事例研究法の意義

や実際に関心を寄せる方々に、広く公開して資するところ大であると信じるものである。

インタビュー記録について

以下のインタビュー記録は、ICレコーダーに録音した音声ファイルに基づくが、文字起こしに当たっては、細谷氏や菅野氏をはじめ発言者の語り口をできるだけ生かしつつも、インタビューと直接には関係のない会話や繰り返しを省いたり、語順を入れ替えたり、場合によっては発言の一部を要約したり、適宜改行や見出しを入れたり、文献情報や語句の説明のため脚注を入れるなど、かなりの編集を施した。記録作成の上では、対話の中での発言の文脈性は極力維持するよう努めたが、個々の発言については、厳密な再現性よりも理解可能性を、つまり発言の意味が読んで容易に分かることを重視したのである。

このような方針で文字起こしした記録は、事前に、すべての発言者の方々に閲読していただいた。その上で、ご自分の発言について、事実誤認の訂正や、発言の趣旨をより明瞭にするための表現の修正等を、必要に応じて施していただいた（こうした修正は、本号では、2－（4）の議論の部分で多い）。さらに、表現の修正にとどまらない補足や補充が必要と判断された場合には、本文中に字下げして、ご本人による【補注】や【追記】あるいは【補足説明】の形で書き加えていただいた。

記録において用いた記号の意味は次の通りである。……（3点リーダー2つ）は、短い間を表す。全角の丸括弧（ ）の内は、筆者による説明や解説の語句や文である。全角の大括弧〔 〕の内は、筆者による補足の語句や文である。また、…＜中略＞…は、インタビューと直接には関係ない会話（例：中途退席者との挨拶など）、公開に馴染まない発言（例：プライバシーに関わる発言）などを省略したことを表す。後者の省略については、発言当事者の了解を得た。

なお、準備と紙幅の都合により、細谷氏とのインタビュー記録を本号に掲載し、菅野氏の分は次号への掲載とさせていただく。

²佐藤健二氏は『社会調査史のリテラシー』（新曜社、2011年）で、従来の社会学史において看過されてきた社会調査史の重要性を指摘し、近現代の日本の社会調査の実践において社会学者が駆使してきた「認識の生産手段あるいは生産様式」という意味での社会学の「方法」への注目を促している。その提起に筆者は賛同する。脚注1の小論および本稿には、農村社会学や村落社会研究における「方法」について、3氏の庄内研究を事例としつつ探りたいというねらいも込められている。標題における「方法」はこうした意味を表している。

2 細谷昂氏とのインタビューと議論

（1）共同研究前史——農民意識調査から水稻集団栽培調査まで

伊藤勇：今日は時間を作っていただき、どうもありがとうございます。お配りしたメモが私の方でうかがいたいと思った質問項目です。…＜中略＞…これに沿ってうかがっていきたいと思いますが、お集まりの皆様の方でもうかがいたいと思ってらっしゃることも色々あると思いますので、適宜絡んで下されば幸いです³。今日の話の対象になりますのは、1975年の『稲作農業の展開と村落構造』（御茶の水書房）に著される林崎 調査と、1984年の『東北農民の思想と行動』（御茶の水書房）に著される北平田調査で、これら2つの作品に結実する3先生の庄内研究における調査の実際に関わる話を、調査の方法や観点の問題を含めて、うかがいたいと思います。通常あまり表立って語られることがない舞台裏の話を含めて、調査の意味や意義を考える上で重要だと考えますので、うかがいたいと思います。

さて、3先生の共同研究は、『稲作農業の展開と村落構造』の「はしがき」によりますと、1970年の夏に3人で初めて林崎に入ったと書かれておりますので、1970年に始まると言えます。しかし皆様ご存じのように、それ以前から細谷先生は庄内に入っておられます。一番最初は、1961年、大学院生の時代に、塚本哲人先生が主宰された北平田調査に参加されています。その調査結果に基づいて、1962年から63年にかけて「農民意識の変容と停滞」⁴を『思想』に発表されています。その後、単独で、酒田市大字^{ひろの}広野、旧広野村の上中村集落^{かみなかむら}などで水稻集団栽培に関する調査に従事されておられまして、論文としては、1968年に「水稻集団栽培と『部落』」⁵が著されています。そうして、1970年に3先生の共同研究が開始されることになるのですが、ここではまず、その前史あるいは重要な前提として、[1960年代に細谷先生が関わった庄内での調査研究に関して]当時の研究動向や研究課題、それとの関わりでのフィールドの選択の問題、なぜ北平田だったのか、なぜ上中村だったのかという問題や、人との出会いの経緯などをお聞かせいただければと思います。

³ このインタビューは、2011年12月4日午前、宮城県仙台市内で実施された。細谷先生の喜寿をお祝いする会の企画の1つとして組み込んでいただき実施したため、会場には、細谷先生のほか、以下の15名が同席した。秋葉節夫、伊藤勇、大関雅弘、加藤真義、菅野仁、北村寧、小林一穂、小松田儀貞、佐久間政広、徳川直人、永井彰、中島信博、永野由紀子、松井克浩、湯田勝（敬称略・五十音順、都合で中途退席された方々を含む）。

⁴ 細谷昂、1962-63、「農民意識の変容と停滞—その構造的=動態的把握のこころみ—」（上・下）、『思想』1962年7月号・1963年1月号、岩波書店。

⁵ 細谷昂、1968、「水稻集団栽培と『部落』——山形県庄内地方の一事例」、『村落社会研究』第4集、塙書房。

共同研究までの農村調査歴

細谷昂：前史のところは、私がしゃべると私の話になってしまいますが、それでいいですか。

伊藤：それで、けっこうです。

細谷：はい、では。伊藤君が書いて下さった通り、私の庄内調査は、1961年に塚本先生が主宰された調査への参加が最初です。それは、教育社会学研究室的の調査で、内容はいわゆる農民意識調査ですね。ランダム・サンプリングをやりまして、300だか400だか忘れましたけれども、農民意識調査をやったんですね。これは、塚本先生が、北平田に鳥海^{とりのうみ}〔憲一〕さんという社会教育主事の方がおられたのですが、その方の援助、手引きで北平田に入ったのです。福武直^{ふくたけただし}先生と塚本先生が書かれた『日本農民の社会的性格』⁶という本がありますね、あれに言う「社会的性格」、要するに意識調査ですね、それなんかがモデルで、意識調査をやった。ルートも社会教育のルートで入っている。教育社会学〔研究室〕の人たちが中心になってやっている、そこに〔文学部社会学研究室的の〕私とか佐藤勉さんとかが参加させていただいた。そのデータを使って、『思想』論文を書かせていただいたというわけです。…＜中略＞…

【細谷氏による補注】この北平田調査の成果は、その他に、塚本哲人「水稻単作地帯における新集団の展開」、竹内利美（編）『東北農村の社会変動』東京大学出版会、1963年、として公表されています。

細谷：それから、ここ〔席上配布のメモ〕にたくさん書いて下さったように、〔1960年代には〕宮城県でも調査をやっています。これには、ここにおいでになる北村〔寧〕君なんかも参加しておられます。これは大体が、東北福祉大学の社会調査実習の調査なんですね。その他には、「農民とマス・コミュニケーション」。これは、田原さんが代表者となった、NHKの放送文化研究所の予算の調査⁷です。田原さんが中心になって組織してやった調査です。それから、宮城町の調査、〔古川市〕高倉の調査、志波姫町^{しわひめ}の調査⁸、この辺は、東北福祉大学の調査実習の調査です。まあ、そういう経緯がずっとありましたが、まだこの辺は、3人でやる庄内の集団栽培の調査とは別です。系統は別系統の、それぞれが、別な単発的な調査です。

【細谷氏による補注】ここに挙げられている調査の他に、私自身が論文執筆は行っていないが調査員として参加した調査としては、思い出すまま拾ってみると、以下のようなものがあります。いずれも、

⁶ 福武直・塚本哲人、1954、『日本農民の社会的性格』有斐閣。

⁷ 田原音和・細谷昂・五十嵐之雄・森博、1967、「農民とマス・コミュニケーション——東北農村におけるコミュニケーション構造と農民の視聴行動」、『放送学研究』14、日本放送出版協会（調査地は、宮城県宮城町〔芋沢・苦地・熊ヶ根〕および古川市富永地区〔狐塚・馬放・長岡針〕、1964年から65年にかけて実地調査。）

⁸ 細谷昂・五十嵐之雄・雪江美久、1968、「農民層分解と『いえ』の変容——1965年時点の宮城県古川市高倉地区」、『東北福祉大学論叢』第7巻（調査地は古川市高倉地区、1965年に実地調査。）樋口晟子・細谷昂・北村寧、1971、「『減反農政』下の農民の対応——1970年時点の宮城県栗原郡志波姫町」、『東北福祉大学論叢』第10巻（調査地は宮城県栗原郡志波姫町、実地調査は1970年。）

社会調査というものについて、学ぶところの多い調査参加でした。

1954（昭和29）年 宮城県白石市の町村合併調査（代表新明正道）。新明正道他「町村合併と地域社会」，東北社会学会『社会学研究』第11号，1956年，を参照。

1955（昭和30）年 第1回SSM調査。富永健一編『日本の階層構造』東京大学出版会，1979年，を参照。

1957（昭和32）年 釜石調査（代表新明正道）。新明正道他「産業都市の構造分析」，東北社会学会『社会学研究』第17号，1959年，を参照。

1959（昭和34）年 八戸市金浜調査（代表小山陽一）。この調査の成果は代表の小山陽一氏の転出もあって，論文にまとめられていません。

1960（昭和35）年 岩手県西根村田頭における農政の浸透と村落体制調査（代表竹内利美）。竹内利美編『東北農村の社会変動』東京大学出版会，1963年，を参照。

1960（昭和35）年 福島県梁川町における青年連盟の消長と村落体制調査（代表竹内利美）。同上書を参照。

その他，学部学生の時か大学院に入ってからか，宮城県の三陸沿岸の漁村調査にも何箇所か参加しています。

佐藤繁実さんの手引き

細谷：後に庄内の集団栽培の調査をやるきっかけになったのは，その手引きをしてくれたのは，この中でもご存じの方も，お会いになった方も多いと思いますが，佐藤繁実さんという人がいまして，実が繁といういかにも農家の息子らしい名前ですが，まったく在野の農政評論家，肩書きを聞かれると困るのでこう言っております。要するに，大きな農家の次男坊なんですね。だから後継ぎでなく，だから大学に，明治大学に行けたわけです。東京に出て，明治大学を出て，そこで農業経済学の先生たちと知り合って，一種の農政評論家的な活動をしていた人です。

しかし，ただの評論家ではなくて，庄内に戻って酒田に住んでいたわけですから，いろんな農民たちと交流をして，地元でも庄内農村問題研究会という会を作っていましたね。ご存じの阿部順吉さんなんかはそのメンバーの1人ですけど。で，若い農民たちの元気のいい連中と，グループを作って議論をし，これからの稲作農業のあり方なんかを議論していた。そして，その人たちが担いで，酒田に革新市政が実現したんですね。小山孫次郎おやまごじろうという人を担いで，市長にしたわけです。当時のいわゆる革新市政の流れの中で実現したわけですね。この小山という人は，本間家ほどではないが，酒田の大きな地主の家の息子で，お金があるから，東京に出て大学で勉強して，農政評論家的な活動をやっていた。当時の農林省に農業総合研究所というのがありますが，その客員研究員みたいなことを，研究所の酒田駐在員だったか，そういうことをやっていたわけです。その人を担いで革新市政を実現した。

酒田方式の構造改善と庄内農村問題研究会

細谷：ちょうどその頃、1962年から農業構造改善事業が始まります。ご承知のように、1961年に農業基本法ができます、もっというと、1960年が日米安保条約ですね、そこに日米経済協力という1項目が入っていて、当然日本政府は、これからアメリカはじめ外国の農産物が入ってくる、それに対応するために農業基本法を作って、1962年には農業構造改善事業を始める、そういう転換期だったわけです。それにどう対応するかというのが、佐藤繁実さんを中心とする庄内農村問題研究会、当時の若い農民たちのグループ〔の課題〕であったわけです。その人たちのアイデアを取り入れて、小山革新市政が、構造改善事業に対して、農林省にこういう文句をつけました。当時は、土地基盤整備をやって、30^{馬力}規格の土地基盤整備を行い、そこにトラクター、大型機械を導入するというのが基本だった。30～40馬力のフォードとかファーガソンの輸入大型機械なんですね。これは宮城県の志波姫町の調査で調べましたが、これは当時としては、非常に大きな機械だったんですね。その導入に農林省が補助を出す、そういうやり方に小山市政は反対したわけです。そのブレーンが佐藤繁実さんや庄内農村問題研究会のメンバーだった。まず、土地基盤整備はやらない、物凄いお金がかかりますし、それに、すでに明治末から大正の初めに1反歩区切りの耕地整理ができていましたからね。それから、トラクターは大型でなく、中小型でいい。これは当時の農林省の基準に合わないわけです。だから承認しない。それを、酒田市が頑張って、しょっちゅう陳情に行って、酒田だけの特例として認めさせた。そして、構造改善事業の補助をとった。そういう流れがありました。

太成農場と集団栽培

細谷：しかし、それでも、お金がかかる。中小型のトラクターといっても、高い。だから、農民側の努力として、これを共同で入れましょう、単独でなく、共同で購入し、共同で使おうという話になります。

こういう流れの中では、例えば、〔庄内農村問題研究会の〕阿部順吉さんたちが完全共同化を目指してやった「^{たいせい}太成農場」の試みもありました。これは、家から切り離して、法人組織を作り、法人組織が経営主体なんですよ。これはその意味では非常に合理的に、いろんな歴史を背負った農家経営とは違って、青年たちが頭で考えて作った法人組織が経営主体でやったのですが、1年で潰れちゃった。なぜ潰れたのかというと、ある家に借金があった、家と別に法人組織を作ったので、それは家の問題であり、法人組織の問題ではないはずだった、理屈の上では。しかし、法人で機械を買ったりするために出費が必要になるが、家に借金があるメンバーは金を出せなくなる。長い歴史がある家のしがらみが、切り離したはずだったが、影響してしまって、潰れる、ということが起こった。それが1961年。

その1～2年後に、佐藤繁実さんたちが中心になってやった集団栽培は、完全に家が単位なんですね。家を否定しないで、家々の共同である部落の共同にしたんです。以前からある農家、そ

の集団である部落の組織をそのまま利用したわけです。部落で話し合って、部落でみんなで協定し合って、トラクターを共同で入れましょう、というやり方。あくまでも、それまであった家を母体にして、家の経営を生かして、部落の組織を利用して共同する。それが庄内の集団栽培なんです。だから、最近よく言われている〔東日本大震災復興関連の〕特区、企業経営を入れて新しい漁業組織を作りましょうというのと、全然違うわけです。家々の共同としてやる、それが成功したので、それこそ燎原の火のように、庄内中にダースと一般化して、庄内の全水田の50%を超える面積にまで普及したわけです。それをテコにしてトラクター、15～20馬力の輸入品でない安いものが導入されます。佐藤繁実さんによると、当時はまだ農家が大型のトラクターを使いこなすまでには至っていないので、中小型でまず習熟すべきだという考え方もあった。それが中小型からという理由だったのです。

こうしてトラクターが入ってきて、庄内の機械化農業が出発したわけですね。もちろん、機械化農業が良いか悪いかというのは、別問題ですよ。最近の有機農法を考えている人たちから見れば、機械化農業ではなくて、もっと自然に近いやり方、農薬を使わないやり方をということになるでしょうが、それは、いったんトラクターを導入して機械化農業をやって、その反省として出てきたものであって、当時の農民にとっては、トラクター農業というのはあこがれなんですね。

〔肉体的に〕大変だったんですから、当時は、特に馬耕の時代はね。当時の集団栽培では、トラクターの共同の他に、農薬の共同散布もあった。それから、田植えの共同田植えもあった。当時は、農薬を使って、どう徹底的に防除するか、いかに虫やイモチを出さないかというのが、最先端のやり方だった。今は、その反省で、もう一回り新しくなっていますがね。そういう時代だった。

そういう取り組みをしている佐藤繁実さんが、私をあちこち案内してくれました。その佐藤さんを私に紹介してくれたのは、^{しまぎきみのる}島崎 稔さんです。「村研」^{そんけん}（村落社会研究会（現在は日本村落研究学会）の略称）で活躍された方です。もう亡くなられましたが。

伊藤：佐藤繁実さんに出会われたのは、1961年の北平田調査の時ですか？

細谷：いや違います。その調査は、社会教育畑の調査でしたから、会っていません。

伊藤：1961年に〔北平田の〕太成農場のことは知っておられたのですか、また、阿部順吉さんたちには会っておられましたか？

細谷：ええ、太成農場のことは知っていましたし、阿部さんにも会ってました。有名でしたからね。福武先生たちが調査していて、何と言いましたか、福武先生を中心に、^{まつばらはるお}松原治郎さんや^{はすみ}蓮見音彦さんや^{おとひこ}高橋明善さん^{たかはしあきよし}たちが書いた本⁹が出ていましたから、知っていました。阿部順吉さんとも出会っています。話も聞いております。だけど、調査としてはまったく別です。つまり、フィールドがたまたま北平田で、そこに太成農場もあったから、本も出ていて知っていたから、話

⁹福武直（編），1961，『農業共同化と村落構造』有斐閣。

を聞きましたが、[1961年の] 調査自体はあくまで社会教育畑の調査，農業畑じゃなかった。その時，阿部さんには会いましたが，佐藤繁実さんには会っていません。

佐藤繁実さんに会ったのは，島崎稔さんと親しくなってからのこと。ここに当時のノートを持って来ましたが，これを見ると，佐藤さんと会ったのは1966年，ちょっと後ですね。

大関雅弘：先生が太成農場についてお知りになったとき，その完全共同化という方式は，いけそうなのか，それとも困難なのか，そのとき直感的にどう思われましたか，また，これを理論的に位置づけることなどはなされなかったのですか？

細谷：うーん，どうかな。その時はもう太成農場はつぶれていましたからね。1年足らずでつぶれちゃった。私は太成農場については直接調査もしてないのでね…… [他の研究者が] いっぱい調査していましたし，書き物もいっぱいありましたから。一方で，庄内では部落ぐるみの集団栽培が燎原の火のように広がりつつある時で，私はそっちの方に興味がありました。それから，佐藤繁実さんは，島崎さんや私を連れて，案内してくれたのは集団栽培の方だったのでね。

でも，今振り返って反省してみると，阿部さんたちの農場は非常に理屈で考えた合理的な組織だったけれども，やはり家というのは，もっといろんな，非合理的な面も含めて，歴史を背負っている，そういう家がある。やはり，それを無視して人工的に，近代的な合理的組織を作っても無理だなあと，後から考えれば，そう思います。

大関：そうすると，だいたい後になってからの評価なのですね。

細谷：そうですね。それに，その後のような農政の補助事業もありませんでしたし，全部自己資金でしたから，困難は大きかったのです。

1966・1967年のフィールドノート

細谷：それで，[集団栽培について] 最初に行ったのは1966年ですが，佐藤さんと島崎さんと私と3人で，余目^{あまるめ}を歩いたんですね。部落の名で言うと，常万^{じょうまん}，小井新田^{こいでしんでん}なんて言う名前が[フィールドノートに] 書いてあります。余目を歩いたときは，農家に泊まって，二三泊泊まって，色々インタビューをして，現に集団栽培をやっている部落で話を聞きました。それから，本楯^{もとだて}に行ったり，あっちこっち佐藤さんが案内してくれました。それが1966年ですね。そして1967年のノートを見ると，上小松^{かみこまつ}という遊佐町^{ゆさ}の部落に行っています。そこが法人をやっていたんですね。それは，北平田で阿部さんたちがやっていたような法人じゃなくて，家と部落を基礎にした集団栽培，それを形式的に法人[農事組合法人] にしているという組織ですね。これは今もやっているのかなあ。誰か分かりますか？

加藤眞義：それは，劉文靜さんが調べて書いていますね¹⁰。

細谷：ああ，そうでしたね。遊佐では，[1990年代に] 農協と生活クラブ生協がタイアップし

¹⁰劉文靜，2006，『農産物販売組織の形成と展開』御茶の水書房。

て低農薬の米を共同開発していますが，[1967年の調査では] その法人のメンバーだった池田さんという方のお家に泊めてもらって，調査に行きました。こんな風に，あっちこっち歩きました。

ここに南平田農協に調査に行った時のノートがありますけど，その日は暑い日でね。田原さんと菅野さんと私とで行きました。もうその頃は3人で調査に行くようになっていましたが……

伊藤：それは何年ですか？

細谷：1967年です。それは暑い日でね。今でも覚えてるんだけど，田原さんが，こっくんこっくんで居眠り始めるんですよ（笑）。田原さんがね，農協の人が一生懸命に説明してくれてるのにね，はらはらしてくるよね（一同大笑い）。どうせ，田原さんと私のことだから，前の晩に酒を飲んだんでしょね。田原さんが居眠りを始めるんで，突っついた記憶がありますよ。

【細谷氏による追記】ほとんどお酒をあがらなかった菅野さんが，田原さんと私との共同調査で酒田や鶴岡で夕食を共にすると少しは嗜まれるようになりました。これは先輩に対する後輩からの「よき社会調査実習」だったようです。

細谷：それから，[フィールドノートには] 庄内農村問題研究会の人たちと座談会をやっている記録なんかもあります。そこには，丸藤^{がんどう} [政吉]^{まさきち}さん，佐藤さん，[後に県会議員になった] 関口さんといった名前がみえます。

上中村調査

細谷：もう菅野さん田原さんと3人で調査するところまで話が行ってしまいましたが，最初は，私は島崎さんの案内で佐藤さんと知り合い，当時燎原の火のごとく広がりつつあった集団栽培の中に首を突っ込んだんですね。その流れで，さっき伊藤君が紹介してくれた上中村を調査しました。1967年のことです。

伊藤：1968年には、『村落社会研究』に論文を発表されていますね。

細谷：ずいぶん早いんですね。そうすると，最初に[上中村に] 行ったのは1966年かもしれません。…＜中略＞…いずれにせよ，上中村を案内してくれたのは佐藤繁実さんだったと思います。上中村には黒田さんという後に市会議員になるリーダーがいて，その人の家に泊めてもらって，1人で調査しました。2～3年続けて毎年行ったんじゃないかなあ。で，向こうの家では私のことを「夏休みになると来る人」ということになっていたそうです。ちょうど，東北福祉大学から東北大に移った頃でしょうか。まだ若い30代の頃ですね。

集団栽培というテーマ

永野由紀子：先生のその頃の関心は，北平田という対象地そのものより，集団栽培というテーマに関心があったということでしょうか？

細谷：そうです。

永野：北平田は、菅野・田原・細谷3先生のフィールドとして有名なのですけれども、そこにいったきっかけは塚本先生の調査への参加であり、もともとは塚本先生の関心から選ばれた対象地だった。それが、後には3先生の調査の対象地にもなるわけですが、それは、集団栽培への関心から、佐藤繁実さんに庄内各地を案内してもらうなかで、結果として、北平田が先生方の対象地として改めて選ばれたということですね。

細谷：そうです。

永野：集団栽培というテーマは、当時の学会的なテーマでもあったのですか？

細谷：「村研」は知りませんが、例えば、土地制度史学会などでは、佐藤繁実さんが発表していますからね。「稲作農業の新しい波」というようなテーマだね。本もあるでしょう¹¹。話があっちこっち行って恐縮ですが、当時、非常に注目されたのが、庄内の集団栽培、[新潟県] 蒲原の請負耕作なのです。ここにも一緒に行った方もおられると思いますが、蒲原にも行きました。2つのタイプが稲作農業の新しい動きとして注目されていた。両地方とも水田大規模経営地帯で、庄内は部落ぐるみの集団栽培、蒲原は請負耕作。もう1つ、佐賀も「新佐賀段階」とって注目されていましたが、主要には庄内と蒲原でした。

なぜ注目されていたかというと、蒲原の方は、燕市の洋食器工業など中小企業の工場があちこちにあって、兼業化が進んでいた、それで請負耕作が進んだ。それに対して庄内はまだそういうものがあまりなく、専業農家が多い。それが1点。もう1つは、水利の問題。当時庄内は明治末から大正初めの基盤整備で、用排水未分離だった。だからそこでは、部落による規制が有効になる。一方蒲原は、基盤整備が遅く戦後になって行われたので、用排水が分離している。そこでは部落の機能が働かなくても、各家が勝手にやれる。だから、勝手に各家は請負耕作をやって勝手に規模拡大できる。そういう動きがある。農業経済の人たちは大体こういう観察をしていた。これはたぶん正しい。けれどもわれわれ社会学者が不満なのは、そこでいわゆる部落というものがどんな役割を具体的に果たしているのかという点。用排水未分離という基礎的な条件は分かるけれども、それでは実際に部落というものがどんな役割を果たしているのか、また、それと個別の家との関係はどうなっているのか、という関心をわれわれは持った。そして、そういう段階で、[1970年に] 林崎に入ったわけです。

永野：経済学や土地制度史学会と違って、社会学者として、部落に注目し、共同性に対する共通の関心をもったのは、どのようなきっかけでしょうか？ 最初から、3人の先生の間で共通の関心があったのか、それともフィールドを歩く中で共通の関心ができあがっていったのでしょうか？

¹¹佐藤繁実、1967、「集団栽培プラス中型トラクター稲作の必然性」、『米作 新しい波』（日本農業年報Ⅻ），御茶の水書房。

（2）共同研究のスタート——林崎調査

菅野・田原両氏を誘う

細谷：集団栽培について、上中村に集中して調査をしていた頃、庄内って面白いですよ、庄内に来ませんかと言って菅野さんと田原さんを誘ったのは私だと思います。その理由はね、3人とも自分の調査チームを持っていなかったからね。例えば、文学部には社会学研究室があって優秀な院生がいる。教育学部には教育社会学の研究室がある。田原さんは、教育学部の教授ではあるけれども、大学教育開放センターの教授だった。だから自分の講座がないわけですね。菅野さんは宮城教育大におられた。私は教養部にいた。皆さんと研究会はやっていたけれども、いわゆる講座制の講座はないわけですよ。院生もいない。そういう点で似ていた。ぽつんと一人でいた者が集まったわけです。逆に言うと、われわれがそれぞれ講座をもっていたら、あんなチームは作れないよね。自分のところに助手がいて院生がいたら、その面倒をみなきゃならないからね。だから僕らはその意味で自由だったわけ。で、私が田原さんに声をかけた。これは確かです。菅野さんには私から直接声をかけたのか、田原さんからだったか、ちょっと記憶がはっきりしません。けども、庄内に3人で行きましようと思っただけで声をかけたのは私のはずです。私は、佐藤繁実さんに案内してもらって庄内のあちこち歩き集団栽培を見てましたから。その時お二人がなぜ乗ってきてくれたのか、私はよく分かりません。今、永野さんが言ったように、部落ということへの興味からだったのか、その辺はちょっと分かりません。

村と集団栽培

永野：当時の新潟や庄内への関心は、稲作農業の新しい動向ということで、「村研」や農村社会学だけでなく、学問分野を越えて注目が集まり、研究ラッシュの状況だったようですね。そして、庄内と新潟の違いについてもある程度の共通の見解が出されていた。そうした中で先生は、上中村で調査され、「水稻集団栽培と部落」を書かれた。今から見れば、個別の家を残した形での共同化か、個別の家をなくした完全な共同化かという点で、集団栽培と大成農場を区別できると思うのですが、当時はまだ「家」に対する関心は〔細谷先生には〕なかったように思われますが……

細谷：「家」の方はあまりに当たり前だからね。もう自明でしたからね。……今思い出したんですが、当時「村研」で「村の解体」がテーマになっていますね、あるいは「村の解体の推進力」だったかな。当時の村研年報（『村落社会研究』）を見て下さい。ともかく、それに引っかけて、集団栽培、部落ぐるみの集団栽培に興味を湧いたわけです。

伊藤：「村の解体」がテーマになったのは、1964年ですね。次の年も「村の解体」、その次が「村の解体と再編成」となっています。

細谷：うん、そういう「村研」的関心が前からあって、私が1968年に論文を〔『村落社会研究』

に] 書いているとすると、たぶん、年報の編集委員をやっていた福武先生が執筆を勧めてくれたのだと思いますね。福武先生に「上中村の集団栽培について」書けって言われた記憶があります。

大関：素朴な質問ですみませんが、「村の解体」というのは当時の「村研」では、危機だと捉えられていたのでしょうか、それともチャンスだと考えられていたのでしょうか？

細谷：チャンスではないですよ、それはむしろ危機ですよ。

大関：そこから何か新しいものが始まるというような捉え方は？

細谷：うん、そこから何か新しいものを見つけなければならない、という意味で危機なのです。その新しいものを見つけなければいけないという状況で、蒲原の請負耕作や庄内の集団栽培が注目されたわけですね。1961年に農業基本法ができ、翌年から構造改善事業が始まる、それは危機と捉えられていましたね。その裏には、安保条約の経済条項による貿易自由化がある。それは日本農業にとっては危機だと皆が捉えていたんじゃないでしょうか。農民にとってもそれは危機で、だから、蒲原では請負耕作をやり、庄内では集団栽培をやる。酒田革新市政では、酒田方式と言って、さっき言ったような構造改善事業を農林省に要求して、認めさせる。そういう新しい動きとしていろいろワットと出てきた。

大関：大変な危機の中で何か新しいことをやらざるを得ない、また、やろうと思えばできる、という感じですか。

細谷：まあ、そうですね。

松井克浩：1967年に南平田農協に、菅野先生、田原先生といらしたと、おっしゃってましたが、田原先生や菅野先生に庄内に来ませんかと誘われたのは、その前のことですか、後ですか？

細谷：林崎に3人で入ったのは、1970年って書いてあるんですね？

伊藤：ええ、『稲作農業の展開と村落構造』の「はしがき」（菅野先生執筆）には、「私たちが……林崎を中心に庄内農村に足をふみ入れたのは昭和45年夏休みのことである」と書いてあります。

細谷：しかし、南平田に3人でいったのは1967年だし、田原さんが居眠りをしたのも確かにその時だと思うんだけど。[ノートには田原先生が] 居眠りしたとは書いてないけどね（笑い）。だからたぶん、庄内をいろいろ見て歩いて、林崎に腰を落ち着いたのが、1970年ということなんでしょうね。それで、林崎を私たちに紹介してくれたのは、さっき言った丸藤政吉さんです。これは記憶がはっきりしています。

松井：お三人で一緒に、毎年のように歩かれていたんですか？

細谷：そうです。

伊藤：「皆に向かって」 えー、ここまでのところ、よろしいでしょうか？

菅野仁：うちの親父〔菅野正氏〕から、[この共同研究のメンバーには] 最初は斎藤〔吉雄〕先生も入っていたんじゃないかという話を聞いたことがあるのですが、その点はいかがですか？

細谷：斎藤さんはたぶん入ってないです。それ以前は、菅野先生は、斎藤先生と二人でよく調

査をしていたんですね。弘前のリンゴ農家とかね。二人でよく歩いていた。当時は、斎藤さんは東北学院大学で、自分のチームを持っていないんですね。菅野さんも宮城教育大で自分のチームを持っていない。そういう人たちがその頃はよくくっついて調査していた。協力し合っていたのです。それが、斎藤さんが東北大の文学部に移って社会学講座の中心に位置するようになって、助手や院生の面倒を見なくてはいけなくなり、勝手に動けなくなった。それで、だんだんに、菅野さんと斎藤さんの共同関係より、田原さんや私との共同に力点が移ってきたのだと、だんだんに自然にそうなったのだと僕は思います。

…＜中略＞…

竹内利美先生のこと

伊藤：今の話に関連して、ちょっと話が戻って恐縮ですが、庄内でのお三人での共同研究以前に、田原先生や菅野先生が書かれている論文の中で、例えば、田原先生は1961年に「東北村落における地主制と政治体制」という論文¹²では、山形県西村山郡朝日町の地主制を調べて、その時は竹内利美先生たけうちとしみ代表の科研費で、斎藤先生と共同研究という形で「村研」で発表されて、年報に執筆されています。

細谷：ええ、たしかに、だいたい竹内先生のとった科研費で歩いていましたね。私も行ったことがある。

伊藤：ということは、文学部の院生も農村調査を学ぶという点では、教育学部の竹内先生と一緒に歩いて調査の仕方とかも学ばれたのですね。

細谷：そうです。ただ、調査の仕方を学ぶというよりは、連れてってもらって、勉強させてもらったということだよ。

いやね、竹内先生という人は面白くてね。教育学部の誰かから聞いた話だけど、昔の三等車、木の背中の三等車があるでしょ。夜行の三等車に乗って席が空いているとね、その狭い堅い座席にくるっと丸まって、すうすう寝ちゃうんですって。なるほど、調査マンはこれでなきゃならないのかと思ったけどね。僕なんか寝られないですよ、なかなか。堅い木の座席に、こうやって、くるっと丸くなって、すぐに寝ちゃうんですよ。そういうのを学んだりね（笑い）。

伊藤：それは先生が大学院生の時ですか？

細谷：ええ、そうです。私が連れて行ってもらったのは、あちこち随分あると思いますよ。ただ、それはもちろん、ほとんど私の論文にはなっていませんけど。別のもっと偉い人が、江馬えま〔成也〕さんとか、菅野先生、田原先生とか、佐々木徹郎先生とかが論文を書いています。院生の私なんかまだ「馬使い若勢わかぜ」にもならない、「並若勢なみ」か「野郎っこ若勢やろ」くらいのころでしたから。

¹²田原音和，1961，「東北村落における地主制と政治体制」，『村落社会研究会年報』Ⅷ，時潮社。

竹内先生のインタビューというのは難しくて分かんなかったです。話が飛ぶんです、ポーンポーンてね。なぜかっていうと、彼の頭の中では、阿武隈山地ではこうで、北上山地ではこうでという地図ができてるんですね。これは私の比喻ですが、だから或る村に入ってちょっと聞いて、ああなるほどって分かっちゃう、これは阿武隈山地型だなという具合にね。例えば、いろんなお祭りの行事だとか、部落の運営の仕方だとか、直ぐ分かってしまうので、飛ぶわけです。が、こっちはその間が分からないから、困ってしまうんですね。その点、菅野さんや田原さんのインタビューは、僕でもついて行けました。竹内先生のような名人芸のインタビューではなく、普通のインタビューをして下さったのでね。竹内先生は民俗学的興味が強かったしね。

林崎の面白さ

細谷：林崎に最初に入ったのは、丸藤さんが連れて行ってくれて、鶴岡からの電車で乗っていた。高田に駅があって、あそこで降りてトコトコ歩いて農協まで行って、農協からまたトコトコ歩いて林崎まで行きました。最初行った時は、部落の人たちが集まってくれました。その時は、佐藤正安さとうまさやすさんが「俺だまされたんだ」って言って機嫌悪かったんです¹³。後では段々ほぐれていきましたが、佐藤正安さんとは、菅野さんが意気投合して、インタビューの中心になっていましたね。私は佐藤実さんという人と仲良くなって、1人で行ってはよく家に泊めてもらって、いろいろ話を聞きました。正安さんが林崎の部落長、部落公民館長で、実さんが実行組合長だったのです。ほとんど年は同じですけど。

林崎で面白かったのは、これは菅野さんが丁寧に書いておられますけど、林崎が鶴岡市と町村合併をして、それまで部落の役割、区長の役割が非常に重かったものが、部落の地位が低下して、部落の統制がとれなくなった。それを、鶴岡市が採った独特な自治公民館制度を利用して、部落を再編成した。そのトップに正安さんが就いたわけです。そして、そういう部落、村の再編過程と、その動きに乗かって集団栽培を始める。そういうところが大変面白かったのです。

歴史的パースペクティブ

伊藤：林崎調査では、集団栽培がなぜ部落ぐるみの形態をとらざるを得ないのかという問いを立てて、それを、庄内の村落の構造的な特徴から探ろうとしますが、その構造は近代の庄内の村落の展開過程を一通り追求しないと分からないということで、とりあえず明治の地租改正まで遡って分析がされます。また田原先生の章では藩政期に形成された地帯的特性の話も出てきます。つまり、非常に長い歴史的パースペクティブの中で、現在の集団栽培を捉えようとするのですが、こ

¹³それ以前に東京から来た学者が資料を持って帰ったきり返さなかった事を挙げて、学者への不信感を述べたことを指す。佐藤正安氏は、林崎のリーダーの1人、「すげ笠会」を作る。その活躍ぶりは『稲作農業の展開と村落構造』で詳述される。

ういう視角や発想は、どのようにして出てきたのでしょうか、調査をする中で次第にその必要性が意識されてきたものなののでしょうか？

細谷：歴史的な発想や興味が強かったのは、田原さんですね。菅野さんが強かったのは近代、明治大正昭和で、特に、大正初期あたりについてはかなり突っ込んでいかれましたね。田原さんは、藩政期から明治の初期までに特に興味があったようですね。それがなぜなのか、私には分かりません。それ以前に、弘前や山形などあちこち調査をされて、その中でそういう関心をお持ちになったのでしょうか。私はまだそういう経験がないから、比較的新しいところを担当することになりました。古い歴史的なことはよく分からないのでね。[『稲作農業の展開と村落構造』の] 章別編成を考えたのは菅野さんだと思いますが、全体の構成がそのようになっているのは、[菅野先生の意向というより] むしろ自然にそうなったのだと思います。田原先生は古い方[藩政期や明治期]を[調査で]聞かし、菅野先生は大正や昭和戦前期のことを聞きましたからね。菅野さんは自分でもそういう時代を経験してらっしゃるしね、昭和戦前期くらいはね。菅野さんは大正何年生まれ？……大正12年生まれですか、それなら大正期について直接の記憶はないかもしれませんが、彼の知っている昭和初期、その辺りへの興味は、自分の出身の村の知識もあって、関心をお持ちになったのではないのでしょうか。僕は戦後ですからね、自分で知っているのはね。その辺は菅野さんに聞いて下さい。

なぜ林崎か

永野：部落ぐるみの集団栽培という関心から、3人の共同研究が実現したわけですが、なぜ林崎だったのですか？

細谷：それは、丸藤さんが連れて行ってくれたからです。

永野：でも、他にもいろいろな所を3人で見たのに、結局林崎に落ち着いて共著を書かれた。そこまでのフィールドになったのはなぜですか？

細谷：それはやっぱり、林崎が面白かったから、そして、向こうの人が受け入れが良くて、いろいろ話をしてくれたからじゃないですかね。

永野：林崎が庄内の集団栽培を最も典型的に体现しているからということはありませんか？

細谷：いや、最も典型的なのは上中村なんです。なぜかっていうと、大規模農家と中小規模農家があってその組み合わせで、階層別の出役労働時間の表を見ていただくと分かりますが、きれいにしてくるのは上中村なんです。林崎は各戸の経営規模が大きすぎて、共同をやっても、部落の中では労働力が足りないんです。ただ、トラクターを導入するのに共同する、それがテコにはなっていますが。労働力の授受関係では林崎は経営規模が大きすぎるのです。それでもやったのは、農林省の予算を得てトラクターの共同購入をするため。また、内在的要因としては、それ以前に部落組織の再編をやっていたこと。町村合併で部落の地位が低下し、部落の中が乱れる。例えば集会所である団体が買って置いた炭を他の団体が使ってしまうとかいったトラブルがしばしば

い起こった。それでは駄目だというんで、佐藤正安さんが中心になって、鶴岡市の教育委員会が始めた自治公民館制度をうまく利用して、部落体制の再編をやった。その流れに乗って集団栽培に乗り出したわけです。

その時なぜ佐藤正安さんがリーダーシップをとれたかというと、彼と佐藤実さん、五十嵐源治さんとの3人が友だちですが、農地改革前は正安さんの家は10町以上の自作大経営、実さんは自小作大経営の家、源治さんは年雇層だったものが、農地改革で階層差がなくなり、平等になった。そういう農家の若者が親しくなり、「すげ笠会」というグループを作る。その仲間のエネルギーが集団栽培に向かったのです。その時正安さんがリーダーシップをとることができたのは、奥さんの実家の篤農家から学んだ「分施肥」¹⁴を自分の田んぼで実践して、めざましく収量を伸ばし、まわりの大人を驚かした。若者である正安さんは、それで皆の信頼を勝ち得たのです。農家というのはやっぱり沢山取らないと駄目なんですね。農業技術が下手な人は、いくらしゃべるのが上手くても駄目なんですね。米を沢山取るやつの勝ちなんです。正安さんもしはじめは変な若者と思われていたのですが、大人たちがついてくるようになったのは、分施肥で成功して反収を上げたからでしょう。

永野：非常にエネルギーに満ちた村だったのでしょね。農地改革後の新しい時勢の中で、若い人が意欲を持って農業をする機運に満ちた村で、人との出会いもあったから……

細谷：そうそう、「すげ笠会」などまさにそうですね。上中村にしても、黒田さんという大変リーダーシップのある人がいて、上中村農業問題研究会というような会を若い連中が作ってね。いわゆる「^{くわがしら}鋤頭」の年配の人たちですね、そういう人たちがあっちこっちで研究会を作る。それは農地改革の効果でしょうね。そしてまた、いわゆる新教育の効果もあったかもしれないですね。この人達は新制中学はまだできる前でしょうか、戦後に青年学級とかが動き始めていた頃でしょうか。

人との出会い

永野：フィールドを決めるに当たって重要なことは、やはり[人との]出会いなのでしょうね。というのは、庄内の集団栽培の典型は上中村であるにもかかわらず、なぜ林崎をフィールドにしたのかという理由は、事後的には説明できると思いますが、ある種の出会い抜きには語れない部分が大きいのではないのでしょうか。

細谷：それはあるね、やっぱり。林崎で最初あったとき佐藤正安さんは機嫌が悪かったと言いましたが、それが後では世代的に一番近かった菅野さんと親しくなって、非常に話が通じるとかね。一種の出会いというのはやはり事例研究では大きいですね。

¹⁴分施肥とは、一枚の水田でも場所によって微妙に異なる稲の葉色、生育の遅速を、水田のなかに入って「第六感」で見分けながら、それに対応する追肥を少しずつ振り撒いて生育をコントロールする集約的篤農技術である。

伊藤：そういう出会い，きっかけがあつて調査が始まった後に，またいろいろなことが分かってきて，事例の位置づけがはっきりしてくるということはないですか？ 例えば，[林崎の近隣，豊田の地主] 土門家の文書が沢山出てきてとか……

細谷：土門家[の調査]は後ですね。土門さんという地主の話は，林崎で一杯聞かされて，じゃあ行ってみようかとなつて，行きましたが，文書はそんなに沢山はなかったですよ，土門家個人の文書だけだね。[北平田の] 牧曾根[の松澤家] なんかと比べればね。沢山ではなかった。豊田についてはあんまり行っていない，5～6回は行っているでしょうが，それほどでもないです。林崎の近隣で，80町歩くらいの地主で，いろいろ聞きましたが，集中的に調べたわけではありません。

永野：自作が主体の林崎に対して，土門家のような在村地主が支配する豊田との対比を後でされていますね。また，[庄内における] 川北^{かわきた}と川南^{かわみなみ}¹⁵の地主の違いなども言われています。こうしたことは，はじめから，歴史的資料や文書のある対象地を探す歴史家のやり方とは異なるように思われます。重要なのは，受け入れてくれた人との出会い……。

細谷：そうですね，しゃべってくれる人がいないとわれわれは調査になりませんからね。

（3）『東北農民の思想と行動』へ——北平田調査

なぜ北平田か

永野：林崎の後，『東北農民の思想と行動』では[川北の] 北平田を対象地にされていますが，それは，はじめからそうするつもりだったのですか？

細谷：次は川北に行こうと提案されたのは菅野さんです。川南は経営規模が大きいですが，それは川北に比べると生産力が低い，反収が少ないからです。そして，戦前には，比較的古いタイプの自作大経営が強い地域だった。本（『稲作農業の展開と村落構造』）が出て林崎が一段落したところで，次は川北をということになったのですが，それでは，北平田に行きましょうと言ったのは私です。もちろん，川北も，北平田だけじゃなくて色々な所を歩いていますよ。例えば，遊佐^{かのさわ}の鹿野沢という部落とかね。しかし北平田に集中したせいか，その後は行っていませんがね。ともかく，川北にフィールドを移そうという話になった時に，北平田について，私が以前に調査で入ったことがあり，[地主家の] 松澤^{まつざわ} [與司元^{よしもと}] さんとかとも付き合いがありますよと言って，私が誘ったのだと思います。

伊藤：林崎調査の「はしがき」では，菅野先生が1974年から「川北の代表的村落と思われる旧北平田村に入って新しく調査を開始した」と書かれていますが，それでよろしいでしょうか。

¹⁵庄内では最上川の以北を「川北」，以南を「川南」と呼ぶ。「川北」は飽海郡に相当し，中心地は商業港湾都市の酒田である。「川南」は西田川郡と東田川郡で構成され，中心地は城下町の鶴岡である。

細谷：ええ、それでたぶん間違いないでしょう。

伊藤：そして、続けて「京田地区村落との対比と総合を試みながら、いずれ改めて公表の機会をもちたい」と書かれています。つまり、時間は多少ずれますが、北平田についても京田・林崎と同時並行的にお三人で調査が行われていたということになりますね。

細谷：そうですね。

伊藤：では、その時に、北平田が選ばれた理由というのは？

細谷：それは、今言ったように、いろいろ知っている人が一杯いますよというので、私が誘ったわけです。牧曾根には松澤さんがいました。中野曾根については、阿曾敏勝^{あそうとしかつ}さんという阿部順吉さんの仲間の人がいて、戦後の農協青年部の運動をやった方がいた。最初、[中野曾根では]阿曾^{あそう}さんを訪ねたのかなあ、実際後に、いろいろ話を聞くようになった方は、佐藤喜三郎^{さとうきさぶろう}さんという戦争中に実行組合長をやった方です。喜三郎さんの家には本当によく行ったなあ。

佐藤喜三郎さんに聞いた戦時下交換分合のエピソード

細谷：佐藤さんはすごい記憶力の良い人でね。農民にはああいう人がいるんですね。『東北農民の思想と行動』に書きましたけど、戦争中に、交換分合をやり、それをテコにして自作農創設をやるわけですね。ここにコピーを持って来ましたが、「自作農関係納税集計帳」という資料です、多々良^{たたら} 翼^{たすく}君¹⁶が佐藤さんから受け取って来てくれたものです。これに佐藤さんが一枚一枚、鉛筆書きで、1から3まで番号を振ってくれています。これがまさに出会いなのですが、佐藤さんと戦争中の話を色々していると、戦争中に交換分合をやりましたという話になった。なぜかという労働力不足のため、あちこちに分散している田んぼでは困るので、交換分合をやらないといけないという話になった。その当時実行組合長をやっていた佐藤さんは、その調整に携わったわけです。今でもよく覚えています、[佐藤さんの言では]夜家で寝ていると頭の中に部落の田んぼが浮かんできて、あの田んぼとこの田んぼを交換するとちょうどうまくいくなあと思えこれ考えたそうです。それくらい記憶力が良い人だったんですね。

実際、交換分合というのは、大変な作業です。全部が自作地ならよいのですが、こっちに小作人がいて地主の小作地を1反歩耕作している、こっちには自作農が耕す1反歩の田んぼがある[という場合]、この小作地と自作地を交換するとバズルがうまく合う、土地がまとまってうまくいくのだが、しかしそれは、これまで自作だった人が小作になり、小作だった人が自作になり、所有権に抵触するわけです。で、どうするかというときに、自作農創設維持資金というのが当時あって、たぶん郵便貯金か何かが原資の国の補助金なんです、大正の末に始まって、戦争中には随分使われました。国策で自作化するためにね。その補助金を申請して金をもらって、地主の土地に移る自作農にその土地、小作地を買わせたんです。交換分合によって所有権に抵触する土地

¹⁶多々良翼氏は宮城学院女子大学講師（当時）、後に教授。

について、そういう操作をやった。そういう交換分合をごちゃごちゃとやっていると、地主のなかには、もう土地を売りたいという人も出てくるんですよ。純粹に地主が土地を売ったケースですね。そして、交換分合で土地が動いたために買い上げたケース。小作地同士の交換もありました。そういう3つの類型に分けて、[佐藤さんが]説明してくれたわけです。資料には何て書いてありますか？

永井彰：はい、「純粹の自創」、「純粹の交換分合」、「交換分合による地主からの譲渡」とありますね。

細谷：なるほど。そこで、その3類型について、こっちは聞くだけではよく分からないから、具体的にどうなっているのかを知りたいとお願いしたら、彼（佐藤さん）がウーンと考えて、そういえばあの書類は公会堂（部落の集会所）にあるかもしれないと言って、公会堂に連れて行ってくれたんですよ。公会堂にあるいろんな書類箱を開けてね、探してくれました。そして、「ありました！」といって見せてくれたのが、この書類なんです。それに今言った3類型を番号で鉛筆書きしてくれたんです。この資料には多々良君のメモがついているので、たぶん鉛筆書きができてから多々良君が受け取りに行ってくれたんですね。それを集計した表が、この本の何頁かにあります¹⁷。

「耕作の論理」で所有権を動かす

細谷：なんかつまらない話をしているようで恐縮ですが、これは貴重な資料なんですよ。農地改革前に、戦争中に、自主的に農地解放を成し遂げているんです。交換分合を交えて、かなり、[小作地の]5割以上を自作化しているわけです。抽象的に言うと、耕作者の「耕作の論理」で交換分合をやっている、それが「所有の論理」に抵触する。で、「耕作の論理」によって所有権の方を動かしたわけです。普通は、農地改革によってはじめて、駐留軍の指令で農地改革が行われて、それによって地主制が解体した、これが常識ですね。たしかに事実、そうですね、全体としては。しかし、わずかな事例なんだけど、地主の所有権よりも、耕作者、耕作農民の耕作権の方が優位に立って、「耕作の論理」によって所有権を動かした、大変珍しい例なんですね、これは。その意味で、この文書は大変貴重な資料だと思います。田んぼ一枚一枚のことをほんとに良く覚えておられたんです、佐藤喜三郎さんは。

永野：戦前に農地改革を先取りしたことも凄いと思うのですが、今のお話をうかがって、交換分合をよく実現できたものだと改めて思いました。自分の土地に対する愛着があり、交換して移った新しい土地がどのような条件の土地かよく分からないリスクがあるなかで、交換分合は難しく、分散錯圃はなかなか解消されないという話をよく聞きます。今のお話では、戦時下の労働力不足という特異な状況の中で、大きな経営規模の農家が交換分合せざるを得なかったという事情

¹⁷『東北農民の思想と行動』、473頁。

があつてはじめて、佐藤喜三郎さんたちが交換分合に取り組めたということはないでしょうか。

細谷：たしかにありますね。むしろ、経営規模が大きい家が規模を縮小する、ということも行われた。そうすることで交換がスムーズに行くという配慮もありましたが、土地を小さくする代わりに、良い土地を取る、例えば、はずれの方の土地を手放して中小規模の農家に渡し、自分は規模を縮小して部落に近い方の土地、地味の良い土地を取るわけです。なかなかうまいことをやりますね。

永野：戦後は、そのやり方が戦前の大規模経営層に有利に働いたようですね。〔農地改革で、北平田は保有上限を3町5反に制限したため、大規模層は〕結局、規模を縮小しなければならませんでしたからね。

細谷：北平田のはずれ、酒田に近い方、^{にいだがわ}新井田川に近い所は水害地で、土地が低くて、水が浸かりやすいんですね。そういう所は手放すんです。うまいんだね、そういうところは。これは耕作農民の論理ですね。

永野：「所有の論理」に対して「耕作の論理」が優越するような状況があつてはじめて、農地改革が推進された……

小作争議の経験

細谷：そういう土地を動かすだけの自信を農民にもたらしたのは、やはり小作争議〔の経験〕でしょうね。……夕べお話ししたように、相当「ダラ幹」の小作争議ですけどね。本間〔家〕の座敷で交渉するなんてことをやるんですから、相当「ダラ幹」なんだけど、だからこそ成功もするわけですが……

伊藤：それは、^{しょうじりゅうぞう}庄司柳蔵氏のことですか？

細谷：いや、もうその頃は、^{しょうじかんさく}弟の庄司勘作の時代になっています。柳蔵氏はもう亡くなっているんじゃないかな。

永野：庄内の小作争議は、豊かな地主と貧しい小作との間の生きるか死ぬかの壮絶な闘いというよりは、経営上昇をねらう自小作大経営層が中心になっての争議だと思いますが、それでも、所有権は大きく、地主は力をもっていたので、戦前に農地改革を自分の手でやってのけるのは、非常にレアなケースといえるのではないのでしょうか。

細谷：ただ、そういう意味では、林崎の方は、佐藤正安さんという10何町歩という自作地主層、出身階層から言うと古いタイプのリーダー〔が率いる村〕、これと、川北の中野曾根のような、小作争議を媒介して力をつけてきた自小作上層がリーダーシップを握る村。川南では小作争議が起りません。そういう意味では、川北と川南では随分違うということを、われわれも当時から随分意識していました。それは菅野さんも書かれていますね。で、川北に行ってみようやということで、どこ行こうかということになって、このノートには、林崎の次に、遊佐農協、鹿野沢って書いてありますから、林崎に調査に行ったその足で、きっと川北に行ったのでしょうね。

永野：川北のなかでも、北平田に入って〔3人で本格的に調査を〕やった結果、農地改革に関する、今話されたような先生の研究成果が得られたわけですが、それもやはり、あらかじめ予見していたというよりも、結果として〔そうなったということでしょうか〕？

細谷：まあそうですね。ただ、林崎の農地改革についてはね、田原さんがやっています。それで十二指腸潰瘍になってしまったのね（笑い）。膨大な書類を整理したからです。当時はまだ農地改革の資料が残っていたんですね。その膨大な書類を、表にすれば簡単なものになってしまいますが、整理したために、潰瘍になった。田原さんがそう言ったわけではありませんが、僕はそう思っています。

図表の威力

伊藤：その表のことなんですが、林崎も北平田も、両方とも、図表が物凄く多くて、かつ、ひとつひとつが不可欠なものばかりで、今おっしゃった例のように、文書や聞き取りから情報を抽出して要約するとか、概念を分かり易く図示するとか、図表の力といいますか、威力が大変感じます。こういうスタイルは、当時、「村研」の流儀として確立していたものなののでしょうか。

細谷：そうかもしれませんね。田原さん、菅野さんは私より前に論文書いていますから、どこで身につけられたのかよく分かりませんが、「村研」に以前から参加されておられますしね、僕が初めて「村研」に参加したのは第9回くらいからです。「村研」は昭和28年、1953年に始まっているでしょ、だから僕はだいぶ後からです。

伊藤：〔第1回大会は〕1953年ですね。

細谷：東北大学の農研でやってるはずですよ。

伊藤：東北大学の農学研究所講堂となっています。

細谷：でしょ。私はその頃は学部生ですから知らないのです。私が初めて参加したのは、〔東京〕学芸大でやった第9回だと思います。菅野さんや田原さんはそれ以前から参加していて、「村研」から学問的刺激を受けていたのだと思います。

伊藤：図表のすごさについては論文で取り上げたいと思っています。例えば、林崎調査の本の口絵にある部落の概念図ですが、これはどなたが書かれたのですか？

細谷：それはたぶん、元々の絵は、部落の人に書いてもらったのだと思います。それを本屋がトレースに出したのだと思います。トレースに出す原図は、菅野さんが書いたのかもしれませんが。田原さんだったかもしれません。

伊藤：この図は端的に林崎を表現していますね、隣組関係やトラクター班、各家の水田面積など、地理的關係も含めて色々な情報が盛り込まれていて、村の様子がパッと分かります。

細谷：インタビューしながら、書いたのかもしれませんが。トラクターの車庫はどこにあって、といった話を聞きながら書いていったのかもしれませんがね、おそらく。手書きでね。それをトレースに出したのでしょう。

伊藤：また細かい話で恐縮ですが，[林崎調査の中で]「階級模式図」という図がありますね。これは先生ですか？

細谷：それは僕です。

伊藤：こういう模式図で表現するというスタイルは，当時すでにあったスタイルですか？

細谷：あったんじゃないですか（笑い）。

加藤^{なかむらきちじ}：中村吉治先生の本にもそういう図が多いですね。

共同のあり方——インタビューの場での共通認識の形成

永野：私たちから見ると，あの3人の先生の共同研究がなぜ可能だったのかということは，大変興味深いところです。先生方はご自分では説明できないかもしれませんが，なぜ可能だったか色々推測します。お三人はいずれも文学部社会学研究室の出身で，農村の実証研究だけでなく，デュルケームやウェーバーやマルクスの学説研究をやっておられた。また，先生方の文章には，それぞれの問題関心の必然性からくる気迫を感じます。例えば，菅野先生の小作争議の研究も，戦時下を生きた東北農民の次三男としての自分の体験抜きには語れないように感じています。同様に，田原先生や細谷先生にも何かあったと思うのですが……

細谷：あのね，農村調査というのは，農家出身の人が有利な側面というのはもちろんありますが，その方が良いとは限らないですね。…＜中略＞…僕なんかは農村を知らないでしょ，だから，農家の人はこう考えるのか，こう行動するものなのか，と感心，あるいは感動するようなところが，どちらかというと，都会出身の人の方があってね，農家出身の人はもちろん色々知っているので有利ですが，100%有利ではなくて，それぞれに特長があるように思います。

永野：そうですね。菅野先生は農家の出身ですが，細谷先生や田原先生は違います。こうした違いが問題関心の相違になり，それぞれの持ち味として，[共同研究が] うまくいったように感じています。世代の違いもあるのでしょうか……

細谷：それも絡んでいるでしょうね。菅野先生は農家出身ということもありますが，戦争経験を持っておられますからね。これは随分違いますよ。田原さんは，戦争には行っていません。軍には身を置いたと思いますが，戦地には行っていません。私にいたってはまったく軍隊経験は無い。ただ空襲を受けて逃げまどっただけです。

永野：そういう違いが非常にうまくかみ合わさって共同研究のかたちになったわけですが，お話をうかがっていると，同じ対象地を歩き，同じ対象を見ていたことも共同研究がうまくまとまった理由のように思われますが……

細谷：そうですね。これは菅野さんの方針だったのですが，調査は必ず3人一緒に歩くことにしたんです。普通，調査は分担するでしょう。誰は役場で誰は農協担当で誰は村，といったね。それをしなかった。全部3人で一緒に歩いたのです。だから，南平田農協で誰が居眠りしたといったことを覚えてるってことになるんですよ（笑い）。

伊藤：それは、役場に行ったり聞き取りしたりするのも、何から何まで一緒ということですか？

細谷：そう、何から何まで一緒です。これは菅野さんの方針でした。それがとっても良かったと思います。

松井：どうして、そういう方針を採られたのですか？

細谷：わかりません。ご本人に聞いて下さい。ただ、別の言い方をするとね、菅野さんがインタビューして、菅野さんが書いているところを、僕も知っているということです。知っていて、ああ菅野さんこういう風にしたんだなということが分かるんですね。

伊藤：複数でインタビューすると、1人でやるよりお互いに余裕ができて良いという利点もあるのではないのでしょうか。

細谷：それはありますね。ただ実際のインタビューでは、この話は主に誰が聞くという担当は決まっていて、菅野さんが担当の時は「菅野氏が専らインタビューし」、われわれはそれを聞きながらノートをとる、といった分担は当然ありましたよ。

菅野仁：「父は」問題意識は共有したいということは言っていましたね。

細谷：そう、問題意識の共有という点で大きいのは、必ず3人で一緒にインタビューに行っているということですね。例えばね、大正期や戦時期のことを菅野先生がご自分の関心あることを聞かれるでしょ。私は知らないことですが、大変面白くて、勉強になって聞いているわけね。あるいは、田原さんがもっと古いことを聞くとか。そういうことを続ける中でだんだんと、何て言うか、関心が融合して、共通の問題意識、共通の地域認識が、インタビューの場で形成された、ということがあると思います。それからその前後に、当時は汽車だから、列車の中で、今日の調査はこうだったなとか、今度の調査はあそこへ行ってみようとか、行き帰りの汽車の中で色々話しました。あの頃は電車じゃなくて気動車（ディーゼル）だね、最初の頃は蒸気だったかもしれない。ともかく、色々話しました。僕は一番若かったから一番勉強させてもらいました。今思うと、3人で一緒にインタビューをやったのはかなり大きいかもしれないね。

ノートの取り方

加藤：ちょっと確認させていただきたいのですが、ノートの取り方で菅野先生はピンポイントで「項目を整理して」ノートに取る。「細谷」先生の方は全部をノートに取る「流儀だった。」後で論文の中で農家の方がおっしゃった言葉をそのまま引用するとインパクトがあることもあるので、できるだけ全部ノートに取ったというお話をうかがいましたが、田原先生はどんな取り方だったのですか？

細谷：田原先生はどちらかというと、話を整理してノートに取る方だったと思います。整理して書くのが上手だったのは菅野先生で、相手の言ったことを自分の頭の中で整理して、項目にしてノートに書いていくのね。僕はそれができないから、全部ワーッと書いていく。それが逆に、今加藤君が言ってくれたようなメリットになることも、たまにはあるということですね。別にそ

れを狙ったわけじゃなくて、[整理して書くのが] できないから全部書いたのです。

加藤：当時はテープレコーダーとか無かったのですか？

細谷：テープはね、もちろんありましたけど、相手がいやがるの。テープ[レコーダー] なんか置いたら、もう相手がこう（緊張して固まる仕草）なっちゃうのね。今の農家の人は平気ですけどね。

加藤：聞き漏らした所とか、聞き間違いがないとか、電車の中で確認し合われたことはないのですか？

細谷：電車の中でそんなことはしません。テープを取ったインタビューもあります。今でもありますが、例えば、渋谷^{しぶや}勇夫^{ゆうふ}さんと山木^{やまき}武夫^{たけお}さん¹⁸。産業組合運動をやった人ですが、その2人をわれわれ3人でインタビューした。というより、渋谷さんが誘ってくれて、酒田の料亭の「相馬屋へ行こうや」って連れて行ってくれて、電話かけて新堀[村]の山木武夫さんも呼んでくれて、5人で飲んだことがあるんですよ。その時のテープ、今でも持っているから、あれ聞いたら面白いかもしれないなあ。もちろん、[そのインタビューの] ノートもありますけど。

加藤：3先生がそれぞれ独自のスタイルでメモを取ったということですね。

細谷：そうですね。

伊藤：[加藤氏に対して] 菅野先生のピンポイント[の書き方] というのはどういうことですか？

加藤：以前、細谷先生がそういう言い方をされました。それは、[細谷先生に同行して]^{ひがし}東[敏雄]^{としお}先生の牛久^{うしく}[調査] に連れて行っていただいたとき、東先生の調査はもうだいぶ進んでいた段階ですが、[東先生はインタビュー中に] 持って来た自分のノートの空きに、これはここ、あれはここといった具合に[インタビュー結果を] 大急ぎで書き込みをされていました。その書き方を見て細谷先生が、菅野先生もそういう書き方、ピンポイントの書き方をされると言われたのです。

細谷：僕がそんなこと言ったのかな。

加藤：ええ。その、整理した項目について、これまでの調査で聞き漏らした点や不明な点を聞いて、補充していくようなやり方ですね。

細谷：確かに、菅野先生も整理した項目ごとに書かれてましたね。[一続きの] 文章じゃなくて。

伊藤：[とはいえ] 菅野先生も本の中で、印象深い農民の言葉については、インタビューで聞き取った語りのままとされる形で、カギ括弧でくくった形で引用されている場合もあります。『東北農民の思想と行動』の中にも出てきますし、『稲作農業の展開と村落構造』の中での佐藤

¹⁸大正末期から昭和初期における庄内の産業組合運動のリーダーたち、二人は加藤完治の最も信頼された弟子であり、「農本主義的農民リーダー」（菅野正）だった。渋谷は飽海郡北平田村、山木は東田川郡新堀村の人。

正安さんの発言とかも……

細谷：そうですね。[いずれにしろ，] そういう整理した項目で書けるのは，よく知っているからですね。知っている話だから項目に整理して，記録に取れるということでしょうね。僕なんかそれができないから，ワースと書きちゃう……

林崎から北平田へ——対象地の性質と問題の拡がり

伊藤：林崎調査から北平田調査になってきますと，立てている問題が広がっているように思われます。林崎調査では明らかに，なぜ部落ぐるみの集団栽培の形をとっているのかという問題に焦点を合わせて，それを明治期に遡ってそこから解き明かすという書き方になっていると思います。北平田の方では，もっと大きい話，菅野先生の言葉で言うと，「日本農民の典型ともみられる水田単作地帯の庄内農民の生活のリアリティをさぐること」という風に書かれ，これが1970年以來のわれわれの調査のねらいだったのだと冒頭に書いておられます。そして，庄内農民の生活のリアリティというのは，体制変動との関わりの中にあるのだから，その体制変動も視野に収めながら見ていくのだというように，これはかなり，問題というかテーマが大きくなっているように思いますが，それは，調査が進む中で次第に広がってきたということなののでしょうか？

細谷：いや，というよりもね，北平田がそういう所なんですよ。まず，小作争議がそうですね。もっと前から言うと，乾田馬耕の導入というのはどっちかという川南の林崎の方で詳しく話を聞きましたがね，川北の北平田では，明治の末から大正初めの耕地整理事業，本間家がやった事業，それをきっかけにして小作争議が起こってくる。そして戦時中になると，そうした小作争議を背景にして，交換分合をやり，自作農創設をやる。他方，小作争議がだんだん衰退してくると，これは中央の農民組合運動がだんだん衰退してくるのに応じて，中央での派閥争いが庄内まで影響してきて衰退してくると，これに代わって，産業組合運動がさかんになってくる。そういう時代の動きがずうっとありますが，何というか，それにちょうど合うように，いろんな人，リーダーが出てくるんですね。小作争議の時代にはそのリーダーが出てくる。産業組合運動がさかんになるとそのリーダーが出てくる。産業組合運動を元気づける上では，米の統制が大きかったですね，産業組合が米の集荷組織になりますから，そのリーダーが出てくる。戦後になると，農地改革の頃には，青年運動が盛んになりという具合に。時代時代によって，なぜか分からないけれども，しかるべきリーダーが出てくるんだね。

村の中に時代の動きがすごく反映して，良くも悪くも，いかにも戦時中には戦時中の動きをするし，戦後は戦後らしい動きをする。時代の動きに敏感に反応した村なんですよ，北平田は。だから，対象地のせいもありますよ。そういう大きな動きが，農民生活にどういう風に[影響するか]という点は。戦時中には，政府が旗を振って，交換分合して自作農創設をやる資金を準備したり，いわば農林省の歴史に書いてあるようなことが，北平田には，まさに現場のリアリティで出てくるわけです。それは菅野さんが書いている通りですね。それはなぜかと問われると難しい

ですが、北平田は、自小作上層の農民が主導する村、川北の農民たちのキャラクターということがあるんじゃないでしょうか。川南の方がおっとりしていますよね。悪く言うと、小作争議などは起こさない。良く言えばおっとり、悪く言えば保守的。

伊藤：農民の思想と行動の展示場ということでしょうか、菅野先生は庄内そのものがそういう展示場だと言われていますが……

細谷：確かにね、庄内そのものがそうですね。

伊藤：それが、北平田の場合には、何て言いましょうか、典型的に現れてくるというか……

細谷：凝縮して現れてくるというかね。

伊藤：それは、色々調べてくるうちに分かってきたということでしょうか？

細谷：そうね、色々調べてくるうちに分かってきたと言った方が正確でしょうね。ただ、川南[の]林崎を歩いているうちに、川北は違ふよというのが、先取りして分かってくるということがありましたよ。だって、川南は小作争議が起きないんだもの。なぜ起きないかという、さっき言ったように、[地主が] 耕地整理をやらないからですよ。川北で耕地整理をやって、小作争議を起こしてしまって、ひどい目にあった。地主たちはそれを知っているから、耕地整理をやらないんですよ……

共著の執筆法について

伊藤：だいぶ時間が過ぎましたが、休憩入れましょうか、続けましょうか……<中略>…じゃあ続けてお願いします。私の方からお聞きしたいのはあと1つ、本の書かれ方についてです。質問の4番目に書いたことです。この2つの著書は、分担を決めて、こういう構成で書きましょうということで、いったん草稿を書いた上で、それを交換して練り上げていくといったやり方をされたのでしょうか？

細谷：いや、交換はしないですね。

伊藤：ああそうですか。じゃ、構成を決めたら、あとは各自が[完成稿まで]書くというやり方ですか？

細谷：そうですね。ただ、みんなが書いた後に、いったん菅野さんのところに集めたかもしれませんが、よく覚えていません。

伊藤：[原稿の記述で]重複するようなところが出た場合、調整とかはされなかったのですか？

細谷：したかなあ。分担は確かに決めました。『思想と行動』の場合は、田原さんが明治時代を書き、菅野さんがその後で、戦後は私、そういう分担は決めました。これは、さっきお話ししたように[調査の前後の議論で]お互いの関心が分かってましたからね。……調整はしたかなあ。

伊藤：林崎の方は、構成がかなり入れ子といますか、同じ章の中でも互い違いに分担して書かれていますので、あれは調整しないと書けないんじゃないかと思いますが、『思想と行動』だと、第1篇は菅野先生、第2篇は細谷先生、第3篇は田原先生というように大体篇ごとに担当が

分かれていますから、それぞれこんな内容でという了解だけで書けるのかとは思いますが

細谷：そうね、林崎の方は入り組んでいますからね。

伊藤：私が読んだ限りでは、[3先生の叙述の間に] 齟齬とか矛盾とかは見いださせないですね。何でこんなに緊密に書けるのか不思議なのですが、それはやはり、調査の段階から3人で一緒に話をされながら、進めてこられたからなのではないでしょうか？

細谷：そうね、行き帰りの車の中でね、議論しましたし、さっきから言っているように、インタビューを3人一緒にしましたから、ノートの書き方は、加藤君が言ったようにそれぞれ違いますけど、同じ内容を記したノートを持っていますからね。

伊藤：認識とか解釈で食い違いがあったとか、意見が対立したとかいうことはなかったのですか？

細谷：うーん……食い違いはたぶんあったんでしょうけど、行き帰りの車の中で、かなり共通の認識が形成されたのでしょうね、おそらく。……特に、本にするに当たって、まとめのリーダーシップを発揮したのは、菅野先生です。それは、本の「はじめに」や「あとがき」で書いてあるようにね。何か食い違いがあったとしても、だいたい車の中で、後は夜の飲み会でね、今日の農協ではこんな話だったけどという話が出て、あれはどういう意味だったのかということについて、例えば田原さんがこういう意味だったと解釈してくれて僕が理解したりしてね。それが、話を聞いた後そのままバラバラに家に帰ってしまうと、それぞれの解釈がそのまま維持されてしまうけど、行き帰りで車の車の中での話は大きかったんじゃないかな。共通の認識を形成する上で大きかったと思います。

どちらかというと、『思想と行動』の方が大きな分け方になっているでしょう、だから、そういう意味では、こっちの方が慌てて作っているかもしれません。林崎の方が、共通の認識になるように、事前の話し合いが綿密に行われたのかもしれません。だから、そういう細かい区切り方でも可能だったのでしょう。原稿を回し読みしたことはないと思います。記憶が無いから。

伊藤：それが信じられないんです。この930頁の『思想と行動』を、本ができてから初めて[それぞれが]全貌を見るということですよ。例えば、菅野先生が先にある章、ある塊の文章を書かれていて、それを他の先生に見せるとかいうことはなかったのですか？

細谷：そういうことは部分的にはあったかもしれませんが、そういうことを方針にしたことは無かったということです。[回し読みの]記憶はありません。

長い調査の経過の中で形成された「方法的視角」

伊藤：そうしますと、質問事項に書きましたが、『思想と行動』の序章ですね、そこに菅野先生が書かれている「分析視角」あるいは「方法的視角」ですが、これは本ができて初めて、先生はご覧になったということですか？

細谷：ああ、そうですよ。ただね、それは、調査の過程でいろいろな話をしてきた、そのこと

を菅野さんが汲み取って書いてくれている、私の考え方や田原さんの考え方をね。

伊藤：それで違和感は無かったのですか、これは「われわれの考え方・捉え方だ」ということで。

細谷：うん、違和感なかったですね。

伊藤：これは前に電話でもお聞きしましたが、この方法的視角とか分析的視角と言われるものは、これからこういう視角でやるぞ〔調べるぞ〕というものではなくて、長い調査をやった結果としてこういう見方が出てきたのですか？

細谷：いや、長い調査をやっている経過の中でね。結果と言うより、経過の中で形成されたという方が正しいと思います。事前に方法視角を決めて、この方法でやろうやと相談して決めたものではありません。

伊藤：これは、何と言いましょうか、お三人の仕事の中で作り上げられた理論、実質的な理論、農民の思想と行動に関する、ないしは農民生活に関する見方、あるいは、庄内において農民生活はこうに動いているだろうという一種の理論ということなのかな思うのですが、いかがですか？

細谷：うん？ 分からない。

伊藤：えーっとですね、方法的視角といわれているんですけども、こういう見方で見ていきますよと宣言して見る〔調べる〕のではなくて、調査の過程の中で、農民生活はこういう風に動くものだという確信に近い考えですね、それが、一般的な書き方をされていますが、庄内の北平田の事例に即して提出されている。そうした理論あるいは命題のようなものではないかと感じたわけです。

細谷：さっき言ったように、調査の中でいろいろ討論する中で、共通の見方が形成されてきた。それを菅野さんがまとめて下さった。それを見たとき、田原さんはどうか知りませんが、少なくとも私は全然違和感が無かった。本になって初めて見ているのですが（一同笑い）、全然違和感が無かったし、上手にまとめたなあと思いましたね。それはね、やはり、東北大学文学部の出身で、それ以前から日常的に互いにある程度知っている３人が、しかも繰り返しになりますが、調査の行き帰りとか、まさに調査の過程の中でいろんな話し合いをしていて、わりあい、共通の分析視角なり共通の捉え方ができるには、それは有利な条件だったでしょうね。全然違う学問的雰囲気や育ってきた人たちではないからね。

（４）モノグラフ的手法と一般化の問題をめぐって

モノグラフ的手法と一般化の問題

徳川直人：すこし振り返った形になるかもしれませんが、いわゆるモノグラフの方法の意義などを先生が自覚されるようになったのは、今までの話で言いますと、どの辺りからなのでしょう？

細谷：「村研」の中で、誰が言い出したのかは分かりませんが、一般的なことをしゃべる場合でも必ず自分のモノグラフをもってしゃべれというのが「村研」の作法だ、ということはよく聞われましたね。今考えるとね、モノグラフで一般的なことを言うというのは形容矛盾なんだけど。当時だったら例えば、地主制をどう評価するかとか、ちょっと古くは、日本の部落の封建遺制の問題とかいった大命題があるわけですが、そういう大きな議論にからんでいくときに、必ず自分のモノグラフをもって言えと、それが「村研」の学問のやり方だ、ということはよく聞きましたね。これは、田原さん菅野さんだけじゃなくて、どんな人からもね、抽象的な理論だけしゃべるのは駄目だと言われたですよ。しかも、統計的調査というのはどうしても限界があるという認識があって、やっぱりモノグラフ、事例研究でモノグラフを書いて、「村研」で一般的なことを発表する場合も、村や農民の生活の微細なニュアンスまで突っ込んで認識して、それを踏まえて必ず発言すべきだと言われました。「村研」の議論の中ではいつも、私が行っているこの村ではこうだという〔形で〕議論をやっていたんですよ。だから、対立したり食い違ったりするのは当たり前なんです。

だけど、食い違って、そこで議論が始まるわけです。一番論争になったのは、共同体論争ですね。中村吉治門下の共同体概念と、島崎稔さんたちの農業経済学で議論になった共同体概念とはまったく違うわけよね。そこで「共同体」という言葉をどちらかが使うと、もう片方が立って〔発言し〕、必ず議論になる。そのときは必ず、島崎さんなら島崎さんが調査した事例を踏まえて発言するし、中村門下なら村長〔利根朗〕さんなどが、煙山調査を踏まえて発言する。そう、共同体概念が当時一番論争になりましたね。……だから、そこが方法的には、「村研」で面白いけれどもクリアされていない問題だと思うんですよ。モノグラフをもって一般的なことを言う、ということの問題ですね。それは形式論理的には矛盾ですよ、その矛盾をどういうふうに解決するか、整理するか。

そこで具体的には、有賀〔喜左衛門〕先生が「民族的性格」ということを言いますよね、タテにつながっていく、それが日本の社会の民族的性格だという。タテにつながって一番上は天皇にいくわけですが、有賀先生はそれを石神村のモノグラフをベースに言われた。石神村のモノグラフでは確かにそうなんだけど、それをいきなり「民族的性格」と言ったら、これは相当乱暴というか一面的なはずなので、その辺のところは「村研」で未だ整理されていないんじゃないかな。

伊藤：その、石神のモノグラフに基づいて有賀先生の理論があったとすると、別のモノグラフでもってその理論を反駁するということは有り得ますよね。この事例に基づけばメカニズムはこ

うだった、だから違うんじゃないかという話になれば、そこで議論はどのように展開するのですか？

細谷：だから、議論は食い違ったままになりますよね。

伊藤：ああそうですか、それは反駁されたということにはならないんですか？ 当てはまらない事例が出てきたのですから。

細谷：いや、お互い一步も譲りません。だって自分のモノグラフではそうなんだから（笑）。

伊藤：理論が当てはまらない事例が出てきたら、降参するしかないと思うのですが、そうじゃないんですか？

細谷：いや、なりません。俺んところの村では言えるのですから。だからね、それが今でも「村研」で未解決の問題だと思うのです。モノグラフでもって一般的なことを論ずるということのね。モノグラフでもって論ずることのメリットは確かにあります。統計的調査と違ってね。しかし、一般化、一般性とどうつなげていくか、そこを有賀先生は、当時の封建制論争の背景があったから「民族的性格」と言っちゃった、こんなことを言えば怒る人がいるかもしれないけれど。やっぱり、石神村みたいな類型もあるけれども、他方庄内のような類型もあって、庄内はどっちかというと平等主義で、村寄合で決めていくという仕組みになっている。違う村落のタイプもあって、それぞれが特徴をもって日本社会の一面ずつを代表しているんだというような議論から進めていかなければいけないと思うのですが、その辺のところは「村研」で整理されていないんじゃないかな。ああいう問題提起¹⁹を編集委員会にしたのも、こういう意図もあったんです。編集委員会ではここまで言わなかったけどね。

モノグラフで「意味的一般化」を目指す

伊藤：先生が〔『村落社会研究ジャーナル』に〕書かれた「意味的一般化」という言葉は大変惹かれる言葉なのですが……

細谷：ええ、私は「意味的一般化」と言いました。モノグラフで量的一般化はできない、しちゃいけない、間違いだ。ただ、それじゃ、それぞれのモノグラフによって、「私はAという村を調査しました。A村ではこうでした。」ということしか言えないのか、そうではないだろう。A村はA村でいろんな因果連関があってそういう姿になっているのであって、その因果連関というのは、極論すれば、まったく同じ条件の村ができれば、同じ形ができるはずなんです。実際にそんなことはないけどね。だから、意味的に、この村の因果連関のもっている意味的な普遍性というか、他の村を研究するときに役に立つことができる、そういう意味的な一般性、これは〔モノグラフによって〕主張してよいのではないかな。そこのところ、僕自身まだ整理できてないとこ

¹⁹細谷昂，2011，「村研アーカイヴス『調査と方法』の企画提案」，『村落社会研究ジャーナル』（日本村落研究学会），34号，41-42頁。

ろはあるんだけどね……

伊藤：事例に基づいて、なぜいかに、どのように動くのかを説明する一種のモデルといいますか、これを提出しようということですね？

細谷：そうそう、そういうこと。そのモデルは、他の村を研究するときにも役に立つ、そういう意味で一般性、普遍性をもつ。そういう辺りを整理しないと、モノグラフ屋であるわれわれは、うっかりすると、自分の行った村は可愛いから、どうしてもそれを量的な一般化と間違っちゃうといけないよ、ということです。……よく読んでみると有賀さんも苦労していますよね、「一村落が日本の全体の村落と関連する意味」²⁰とか不思議な言い方をしていますよ。…＜中略＞…モノグラフの意義としては、外国の社会、外国の村と日本の社会、日本の村のどこがどう違うか、違いをはっきりさせるという意味もありますね。違うことにおいて一般性を見いだす、これも自己矛盾的な表現ですが。その辺どうぞ整理して下さいよ。

【細谷氏による補足説明】

私が言った「意味的一般性」とは誤解を招きやすい表現だと思いますので、「意味的普遍性」と言い換えたいと思います。それは事例のもつ意味（条件と因果関連）がどれだけ他の事例の理解に資することができるか、ということに他なりません。

事例研究は、当然ながら統計の意味での「一般性」は主張することはできません。諸要因の関連について、例えばその間の有意差を検定によって確認するというような方法は取れない。事例研究によって可能な因果関連の解明とは、家や村のある特定の姿と、それが別様ではなくこの様になっていることの原因と思われる諸条件との間を、十分に納得できるように結びつけて説明すること、です。まだ十分に納得できるように説明されていないと考えられるなら、さらに調査を続けて、別の面から観察し、あるいはまた、さらにその背後にあると考えられる要因を見つけ出して、納得できるように説明に近づけて行く。福武直先生が古典的な社会調査法の本のなかで、事例調査について「多数の特性や要因を連結して全面的包括的に因果関連をインテンシブに調査することができる」と述べておられますが（福武直『社会調査』岩波全書、1953年、61頁）、しかし上のような、十分に納得できるように説明するという課題を果たすためには、「全面的包括的」であることができる、というよりも、「全面的包括的」でなければならない、と言い換えた方が適切かもしれません。そのようにして出来事の間因果関連を十分に納得できるように説明できるようになれば、その事例と同じあるいは類似の条件をもつ他の事例は、同じあるいは類似の姿を示すと推測することができるはずで、その意味で、十分に納得できるように説明された事例は、ある種の普遍性、いわば意味的普遍性をもつといえると思います。

しかし意味的普遍性とは、そのようなポジの普遍性だけではなく、ネガの普遍性もありえます。例えば、石神の大屋斎藤家や野沢の野沢本家のような「大家族」とその分かれの同族団について有賀先

²⁰有賀喜左衛門、1967 [1939]、「大家族制度と名子制度」、『有賀喜左衛門著作集Ⅲ』未來社、31頁。

生が報告しておられるところを読んでみると、こういう形態は庄内のような平場の水稲作村には成り立たないな、と納得できます。ということは、これらの「大家族」、同族団についての有賀先生の説明が、意味的普遍性をもっているからです。

しかし、ボジの方に戻っていきますと、実際には、条件が近似していても、家や村の姿は異なるという場合が多いです。例えば、庄内地方と同様な水稲単作地帯である新潟県蒲原地方では、集団栽培は形成されることなく、むしろ個別の請負耕作が普及して、この相違の原因は何かが問題とされたことがあります。このように、条件は類似していても異なった家や村の姿が見いだされれば、それは何故か、が問われてさらに認識が深まるのであり、むしろその方が学問的には望ましいことといえると思います。私のいう意味的普遍性とは、そのようにして次第に獲得されて行くのであります。

なお、伊藤君から「モデル」ではないかという質問があり、この席では「そうそう」と肯定的な返事をしたようですが、しかし「モデル」という了解にはいささか違和感があります。モデル構築をねらっているわけではなく、あくまでも特定の事例の個性的な姿、その因果連関の理解であって、その理解が他の個性的な事例の認識を助ける、その意味で他の事例の認識にまで推し及ぼされるわけです。私が「一般性」ではなく、「普遍性」ということばを使ったのは、そのような意味においてです。このように考えて見ると、有賀先生が、「一村落が日本の全体の村落と関連する意味」とっておられるのは、まことに適切な表現だったと思います。

ここでふと、エンゲルスとマルクスが「ドイツ・イデオロギー」のなかで、「allgemein」と「universal」ということばを使っていることを思い出しました。どちらも「一般的」と訳せますが、私のいう「普遍的」に当たるのは後者なのかもしれません。例えば *der universelle Verkehr* などです。「広く行き渡る」というような意味でしょうか。この会合にはマルクス研究者の方も多くおられましたので、教えて頂ければ幸いです。

多面性と重層性

徳川：今お話になったことと、歴史を掘り下げていく歴史的視点 [との関係について]、先生の御作品はよくモノグラフ的著作と言われるんですけど、普通教科書に書かれている以上に、歴史的な重層性といいますか、そういう特徴を感じるのですが、それと今出た意味的一般化の話、因果連関をつかむということと深く関連しているように思いますが。

細谷：関連しているかもしれませんね。歴史的視野ということでは、私はやはり菅野さんと田原さんに学んでいるんですよ。おっしゃる通り、モノグラフというのは、多面的にアプローチできると同時に、重層的にアプローチできる。多面性と重層性はちょっと違う面があります。同じ人、同じ村でもいろんな側面から光を当てて詳細にモノグラフを書くということと、その村がどういう歴史を歩んできたかということを見ることによって、その村の経験というか、村の成り立ち、村の姿形のもっている重層性ですね。これはやはり、モノグラフ、事例研究をやるとき、統計的調査ではできないことです。

徳川：モノグラフについてよく言われる，諸要因を全体関連的にという場合は，今ここでの多面性といういわばヨコの線と，それにどんな歴史が積み重なってきているかといういわばタテの線とを組み合わせることによって，総合的な視野というか……

細谷：そう，そういう意味での総合ですよ。それから，重層性には，意味の重層性もありますね。それは歴史の重層性とだいたい重なってくるでしょうがね。……簡単に言えば，この村は15戸からなる村である，それだけなら単純な事実ですが，その15戸というのは「それぞれ」どういう家であって，15戸の家がお互いどういうふうに関連してきたし，しているのかという辺りになれば，多面性だけでなく，認識の重層性というものが出てくるはずですよ。だから調査というのは事実を押さえることは大事なんだけど，その事実が実は重層的であり多面的である，それはモノグラフでないと，事例調査でないとできない。まあそんなことを言っていると，統計的な調査はできないですね。物事を単純化しないと統計調査はできないですからね。統計的には，15戸の村は，10戸でもない20戸でもない，15戸の村だと集計するわけでしょ。日本の集落，どこで切るか範囲は分かりませんが，15戸の村はいくつあるか，10戸の村はいくつあるかと調査するのが統計調査ですが，15戸の村でも，1つとって見ても，そこにはさまざまな重層性，多面性があるというのが事例研究，そこで描き出されたのがモノグラフ。それがモノグラフ，事例研究のメリットであり強さですね。

事例調査と統計調査の相補性

伊藤：ちょっと口を挟むようですが，庄内調査の中でも，農業統計は，庄内地方，山形県，全国を含めて非常に多用されていますよね。これはやはり，統計の有用性と言いますか，全体の動向や傾向を押さえる上では不可欠なのでしょうね。

細谷：そうですね，そう思います。だから，15戸の村が実は多面的であり重層的であると言いましたが，多面的であり重層的である，そのどれかの側面について，全国的に位置づけるとどういうことになるかということは，やはり1つの村について事例研究をやる場合でも重要なわけでしょう。例えば，水田化率，庄内なら80数パーセントでしょう。しかし80数パーセントといってもいろんな意味がある，その単純な事実自体がいろいろな意味を含んでいる，そこを追求していくモノグラフと，水田化率80数パーセントの地域は日本中でどのくらいあるかという「統計的把握によって」，ここは実は大変珍しい水田単作の村であると統計的に位置づけることの，両方がやはり大事なのでしょうね。

伊藤：それは何と言いましょうか，モノグラフというものが，質的か量的かというデータや方法の違いを超えているというか，むしろ両者を総合する研究なのだというふうに感じますが……

細谷：相互補完的なんでしょうね。

伊藤：そういう意味では，この前「村落社会研究」ジャーナルに先生が書かれた「シカゴ学派的ではない質的調査が「村研」のモノグラフや事例研究にはあるのだ」というおっしゃり方は，

意味はよく分かるのですが、私としては質と量の話はちょっと、そう言わない方が分かり易いんじゃないかと思いましたが……

細谷：そうかもしれませんね。事例研究と統計調査の違い、これははっきりしていますからね。そう言った方がいいのかもしれないね。

観点の違いと総合

永野：先生、先ほどの「村研」の作法、「モノグラフをもってしか一般的なことを語ってはいけない」という作法ですが、これはある意味では、有賀さんが確立した方法といってもいいのではないのでしょうか。有賀さんは、階層や条件の違いを無視して全国の村から言葉を採集する柳田國男の民俗学の限界を越えて、石神村のインテンシブな事例研究をとおして、モノグラフの方法を確立した……先生のお話では、石神村のような類型もあれば、庄内のような類型もあるということですが、これらは両極端な事例ですよ。同族団的結合の強い村と村寄合的な結合の強い村。石神村で村寄合的な性格を見ようとしてもできないし、庄内で同族団的な性格を見ることもできない。……ですが、こうした事例としての特性だけではなく、モノグラフ的手法による事例研究の場合、研究者の観点の差異もあるように思えます。有賀さんの石神村のように、いかに優れたモノグラフであっても、すべてを網羅した事例研究というのは有り得ず、研究者から見たある観点から現実を分析してモノグラフを作成する。これからの村落研究に与えられた課題は、同じ1つの村を異なる観点から分析してディスカッションすることが必要ではないかとも思えるのですが……

細谷：なるほどね。

大関：今の永野さんの話ですが、事実をあっちこっちから集めてきて並べることに對して有賀さんが批判したということですが……

永野：日本の村についてのインテンシブな事例研究は、柳田國男を批判する中から有賀が確立した方法だと言っただけですが……

大関：それはよく分かるのですが、その後の方、事例研究においては研究者の観点の差異が大きいと私も思うのですが、その場合、事例としての特性をとらえるということとどのように結びつけるのでしょうか。

細谷：同じ対象を、観点の違う人がそれぞれ調査してみたらいいんじゃないかという話でしょ。まさにその通りで、僕の庄内調査では同族団の調査が非常に弱いんですよ。有賀さんに言わせたら、弱いと言うと思います。

大関：それは現実に弱いから、それをとらえようとする観点も弱いということでしょうか。

細谷：そう、現実に弱い。かつて、同族団アプローチというのがあったでしょう。福武先生が東北型と西南型とおっしゃって、東北農村は東北型で同族団が強いとおっしゃった。最初の頃、私もやったことがあるけど、村に入るとまず、この村の本家はどこですかと聞き、AさんBさん

Cさんがわかると、次にAさんの分家はどこですかと聞いていく。いわば村の構造の柱を立てるということを、同族団でやったことがあるんです。それは庄内でもできます。でも、それは、後で小作争議などを研究する上で、あまり役に立たないんですね。それよりもむしろ、小作争議やその他いろいろな研究をするに当たっては、歴史的にはどの家が地主だったかどの家が小作だったかということ、そして農地改革の後、経営規模がこういうふうになって、今の大規模経営はこの家とこの家、1町未満はこの家というふうになり、土地所有と経営規模で村の構造をまず見ていった方が、分かるんです。せっかくなんだけど、同族団アプローチで柱を立ててもあまり役に立たなくて、せいぜい、お葬式の時の座敷に座る位置くらいの話になってしまうんです。それで、ある段階から、庄内で同族団を聞くのは最後にするようになりました。もちろん今でも聞きますが、まずそれを聞いて、それに基づいて他の色々な話を聞いていくということはしなくなりました。だから、対象自体がそうなんだということがやっぱりあるんだと、僕はそう思っています。

永野：石神村と庄内は、やはり対象自体の特性によって、自ずとテーマが違ってくるので、これを重ねて、どっちが日本の村の典型かを議論することはあまり意味がない、という意味で、先生が、モノグラフ的手法は統計的方法と違ってそこから一般化するには限界があると言われたのかなと……

…＜中略＞…

因果連関と意味的一般化

大関：私は、先ほど細谷先生が「意味的一般化」について述べられたことに非常に興味を持ちました。つまり、まったくそこにしか存在しない固有な形態のA村とB村について、それぞれの村の特性を因果連関だけでとらえてもあまり意味がない。A村とB村の特性を、それぞれ「意味連関」に即してとらえることによって何らかの一般化が可能になるのではないかと先生は言われたのだと思います。農村を研究する際の一定の枠組みにおいて、A村とB村はそれぞれ特殊であるけれども、その特殊性の現実的な根拠を「意味連関」によって明らかにする過程で、総合ではないがしかしそれぞれがバラバラでない仕方で一般化しようのではないかという提起だと思いました。……例えば、自小作層が強いA村では、自小作が強いがゆえに小作争議が起こってくるという場合、それは客観的な因果連関じゃなくて、当事者の主観に即した意味連関によって、こういうことがあった場合にはこういうことになりやすいといった意味上の連関を把握することが大切であるというように、先生が言われた「意味的一般化」を理解してよいのでしょうか。

細谷：因果連関も、私は主観的かつ客観的、主観と客観の織りなす、と言いました。例えば、乾田化すると肥料の効きが良くなる、これは自然科学的事実ですよね。だけどそのことを受け止めて人間は、乾田化しましょう、そうすれば米が沢山とれるようになるよといって一生懸命乾田化に努力する。そこには既に、人間の意図・動機が入ってきますよね、ウェーバー的に言えば。

大関：「因果連関」自体が客観と主観が織りなすことによるものであることをふまえたうえで

の「意味的一般化」なのですね。人間の意図・動機といった主観的要素を考えた場合に、それがうまくいく時とうまくいかない時がありますよね。事実を事実と知っていても、実際にリーダーシップをとれるような人がいなければ、そのままで終わってしまうことがありますよね。だから、客観的にこうなるという因果連関に対して、人間の営みの中で意味的な連関として一般化することで、もう少し緩く連関を掴まえて、A村はA村としての、B村はB村としての特性を把握していくことが必要なのか、と先ほどは勝手に思った次第なのです。

細谷：いや、ちょっと分からないけど、僕が言ったのは、事例研究をやる時に、この事例においては、さっきの農家15軒の例で言えば、単純な事実をひとつひとつ確定し叙述することだけじゃなくて、その村の成り立ち、なぜいかにしてそのようになってきたのかという因果連関を捉えることによって、その因果連関のもっている意味の一般性というのは、例えば、水田単作の村で、こういう条件のあるところでは、こういう因果連関が生じてきたから、この村はこういう構造になっているという説明をやるわけでしょ。そうすれば、その因果連関については、同じ条件があれば同じ事柄が生ずるであろうという、一般化は可能に、その範囲で一般化可能になるはずだ。これは、統計的一般性であるとは保証できない。だけど、同じような条件があれば、同じような社会的出来事が起こるであろうということにおいて、意味的な一般性のもつということは主張していいのではないかな。だけど、それは依然として、統計的には、ごく少数事例であるかもしれません。

大関：「意味的一般化」について少し理解が深まりました。ところで、あらかじめ総体として、村についてなら村、家についてなら家について、あるいは歴史的に村とはこのように形成されたものであるということについて、先生のイメージの中であらかじめある程度の統一体を想定しているのですか、それとも、そういうことは想定しないで、事実即して因果連関を追う中でその都度掴まえていくのですか。意味的な一般化という掴まえ方には、何かもうちょっと広い、まとまりのあるものを念頭に置いていらっしゃるということはないのですか？

細谷：それは、近世の村は、検地であるいは村切りでつくられるわけですからね。ある枠というか、全体の姿を思い描くということは、それはありますよ。近世においては、藩権力によってある村がつくられるわけですから。ただ、石神の場合はね、ご存じの方がいるかもしれませんが、大家斎藤家は、別の村に土地をもっているんですよ。そこに名子、分家があるんですよ。南部藩では村切りをやっていないんじゃないですか、やったとしても弱いんじゃないですか。

永野：石神村はもともとひとつの藩政村ではないですよ。藩政村の中の一部です。ひとつのまとまりをもった部落であることは違いないですが。

細谷：いや、別の藩政村に、大家斎藤家の土地があるんです。だから、南部藩領って、特殊性があるんじゃないかな。……いま大関君が言った話からずれてしまいましたが、それは、全体的なイメージはありますよ。

大関：理論の構築と言った場合、先生はどのようなレベルで考えておられるのかなという話を

今朝伊藤としていたものですから、うかがってみました。

意味的一般化，統計的一般化，理論的一般化

伊藤：「意味的一般化」とおっしゃったのを，理論的な一般化と読み替えるとまずいですか？

細谷：理論的一般化ねえ。理論的一般化というと統計的な一般化と重なってこないかな……いや，統計的一般化と理論的一般化は違うんだな。[統計的一般化は] 単に量的に多いというだけだが，あるいはAというファクターとBというファクターが統計的に関連するということの確定であって，AとBの間に因果連関があることを統計的には説明できないですからね。

伊藤：ええ，[AとBが] 統計的に有意に関連すると言いたいようがないんでしょうね。

細谷：だから，統計的な方法も，最終的には，意味の読みなんだよね。盛山[和夫]さんなんか，そう書いていますよね。「社会調査は解釈である」とね²¹。

伊藤：なぜこうなるのかとか，いかにしてというのは，統計では説明し切れないんでしょうね。推定はできても……

細谷：[ただ] 理論的一般化という表現とるとね，統計理論もあるから，[その含意を避ける意味で] あまり使いたくないですね。

伊藤：ああ，なるほど。

徳川：辞書的には，統計的一般化と区別するために，理論的一般化って使うこともあるんじゃないでしょうか。例えば，われわれの分野では，ここでラベリングが起きたんだと解釈することは理論的一般化ではあっても，あそこでもここでもラベリングが起きているという意味ではないですよ。そういう統計的一般化と区別して，この事例を理解するためには，ラベリングという理論的な概念を使うとよく分かるし，そう解釈し得る。こういうふうに考えると，これは理論的一般化を行ったことであって，だからといって，みんながラベリングを行っているという意味にはならない。そういう対照のために，理論的一般化という表現を使うことがあってもよいとは思っています。

伊藤：社会調査論の最近の言葉ですと，「分析的一般化」²²という言い方が，わりと一般的かと

²¹盛山和夫，2004，『社会調査法入門』有斐閣ブックス，31頁。

²²シュワントの解説によれば，分析的一般化とは「研究者が特定の事例を理論に関連づけようとする際におこなう一般化の一種。……特定の事情がそろう場合に生起する何らかの現象（事例）に関する研究が，任意の理論やモデル，概念を論証，論駁，改良，精緻化するための証拠として利用される。……解釈人類学者のクリフォード＝ギアツが，小さな事実に大きな問題を語らせることこそがエスノグラファーの仕事だ，と述べるとき，おそらく同じことが念頭に置かれている。社会現象の事例ないし実例に関する質的研究で得られる知見に最も適した使い道は，その事例ないし実例の母集団への一般化ではなく，概念や理論的命題やモデルへの一般化である，と主張する研究者は多い」（T・A・シュワント，2009，伊藤勇・徳川直人・内田健（監訳）『質的研究用語事典』北大路書房，200頁）。

思います。分析的一般化と統計的一般化 [という対比ですね]。量的研究は統計的一般化を目指す。じゃあ、事例研究は何を目指すのかと言うとき、分析的な一般化だというわけです。

永野：モノグラフで一般化することの限界というのは、石神村も庄内もある意味では特殊だということのように聞こえるのですが。特殊な事例である以上、対象のもつ射程が自ずと定まってきます。そうすると、万能のモノグラフがあるわけではなく、石神村という事例と庄内という事例、それぞれ固有な対象がもつ射程がおのずとあるのではないか。安易に一般化することなく、それをまず自覚することが必要ではないかと思います。

その上で、対象のもつ射程だけでなく、分析者のもつ射程というものもあって、石神村も有賀先生とは別の角度から切ることができると思うし、庄内も3人の先生が歩かれたときの庄内と、今の庄内では違うし、一人の研究者が何十年も研究を続けているうちに研究の視点が変わるということも十分有り得るのではないか……。林崎で共著を書いたときの先生と、今の先生とでは問題関心が少し違ってきているのではないか、という意味で、分析者の射程も考えなければならぬのではないかと思います。対象のもつ射程と分析者のもつ射程を両方自覚しながら、統計的一般化とは異なるモノグラフからひきだせる一般的意味を考える必要があるんじゃないでしょうか。その上で、モノグラフを重ねていくことでしか、一般化はできないのではないか。そういうふうにして聞いていたのですが、いかがでしょうか？

細谷：うん、おっしゃる通りなんだけれども、モノグラフをいくら重ねても、量的な意味での一般化は言えないんだよね、いくら重ねても。むしろ逆に、それを言わない方がいい。ひとつひとつのモノグラフには個性がある。特殊性と言ってもいいですが。

永野：むしろ、対象がもつ射程を自覚し続けて、対象がもつ固有性をクローズアップし続けることによってしかモノグラフというものは活かせない、モノグラフのもつ意味を語れないんだという自覚をもてということ、そういう意味で、モノグラフをもって一般的なことを語るという「村研」の作法がもつ矛盾と言われたのでしょうか。

大関：いま永野さんが言われたことは分かるのですが、それにみんな賛成してくれるのでしょうか。対象がもつ射程、論理をつかまえるために、研究者の主観によって、それぞれの視点、射程から迫っていくということですよ。

永野：それを自覚するということです。

大関：その自覚が大切であることはよく分かるんですが、研究者自身の視点、射程ということに [「村研」の] みんなが賛成してくれるかどうかということです。何かそれにもうひとつ論理を重ねる必要があるのではないのでしょうか。ところで、実際にこの点で、庄内で同族団を研究する人がいたら、どういうふうにアドバイスしますか？

永野：庄内をフィールドにして同族団の研究をするのは、対象のもつ射程からすると適っていない、もっと適切な事例があるのではないかというアドバイスはできると思いますが……

細谷：いや、庄内の同族団研究というのは有り得ると思いますよ。水稲単作地帯ではこういう

同族団になるんだ、山村と違ってこうなるんだというね。

永野：石神村や庄内が特殊だとすると、竹内〔利美〕さんが調査した横沢村²³だと、東北の農村あるいは日本の農村として一般化しやすい事例かもしれません。いや、庄内も東北農村としてはかなり一般化ができる事例ではないでしょうか。というのは、『東北農民の思想と行動』の中で、庄内の特徴が〔山形県内の〕村山地方との対比でクローズアップされています。それを見て思ったのですが、村山は庄内と比べると、東北地方のなかでかなり特殊だという印象をもちました。庄内地方は、米に特化した経済で、村山地方に比べると東北地方の他の村々との共通性をより多くもつ事例です。モノグラフをどのように重ねても一般化には限界があるということですが、どのレベルで一般化を想定するかの問題もあるのではないのでしょうか。どの対象にも一般的な側面と特殊な側面があり、石神村も庄内も、特殊な側面だけでなく一般的な側面をもつ以上、それぞれの事例から一般的な意味をひきだすことができる。……統計的な一般化と本来異なる、モノグラフのもつ意味的一般化ということの意味をもう少し理解できるような事例研究をしたいと思うようになりました。

大関：ぜひ、そんな事例研究をしてください。

細谷：もう、そろそろいいですか、お昼も過ぎたし。

伊藤：そうですね。どうも長時間ありがとうございました。

永野：喜寿の先生を長い時間酷使してしまい、申し訳ありません（笑）。

伊藤：本当に、さんざん働かせてしまいました、すみません。

細谷：いやいや、こっちも楽しいから……

【細谷氏による補足説明】

この最後の「意味的一般化、統計的一般化、理論的一般化」の項は、私が「意味的一般化」ということばを不用意に使ったため、それに影響されてかなり議論が混乱しているように思います。すみませんでした。「一般化」ということばを撤回して、前述のように「意味的普遍性」と訂正します。数量的な意味での一般性は統計的調査に任せて、事例研究はあくまでも個性的な個々の事例の認識であり、統計的研究とは相互補完的だとするのが正しいと思います。しかし事例研究であっても、あなたが調査した村はそうだろうが、私の調査した村はこうだ、とお互いに言い放つだけでなく、両者の認識がそれぞれの事例の因果連関を十分に理解できるほどに「全面的包括的」であるならば、それらの認識を互いに重ね合わせることで、福武先生のことばを借りれば「連結」することが可能になり、そこに両方の事例を包括する一層広く深い認識が得られるはずだということをいいたかったのです。

それから「研究の観点」ですが、これはむしろ最終的には個人の決断によります。しかし、現実に研究に活用される「観点」は、けっして一人一人ばらばらではなく、いわば「時代の課題」とでもい

²³秋田県仙北郡旧横沢村（竹内利美，1969、『家族慣行と家制度』恒星社厚生閣）。

うべきものに規定されていることを決して忘れてはならないと思います。有賀先生や喜多野先生の時代には「日本資本主義論争」があり、日本社会の「封建遺制」の如何が問題でした。私の庄内調査の時期は、貿易の自由化をにらんで、日本の稲作はどうなるのか、それを担ってきた家と村はどうなるのか、が問題でした。研究の問題意識はそのような大きな「時代の課題」との関連で見定められなければならないと思います。そうすると、21世紀に入った現在の「時代の課題」は何か、ということが大事になりますが、それを探ることはもう私の任務ではないでしょう。